

Palmer

DUAL BAND FM HANDIE TRANSCEIVER

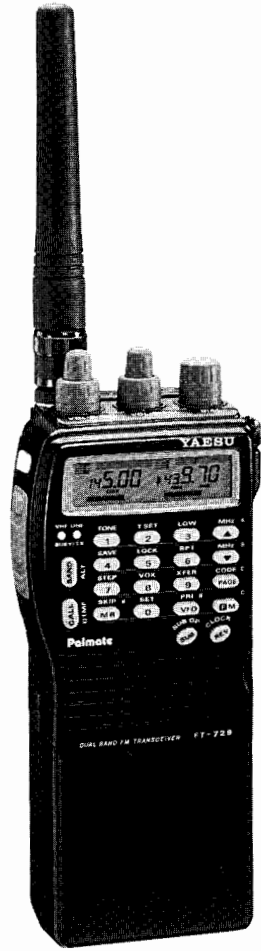
Dual  V-UHF
Handie

144
MHz

430
MHz

FT-729

取扱説明書



この無線機を使用するには、郵政省のアマチュア無線局の免許が必要です。また、アマチュア無線以外の通信には使用できません。

このたびはYAESU FT-729デュアルバンド・ハンディ・トランシーバーをお買い上げいただきまして、誠にありがとうございました。

本製品は厳しい品質管理のもとに生産されておりますが、万一運搬中の事故などにもなう、破損またはご不審な箇所がございましたら、お早めにお買い上げいただきました販売店または最寄りの当社営業所/サービスにお申し付けください。

また、万一故障したときには、お買い上げいただきました販売店または最寄りの当社営業所/サービスまで修理をご依頼ください。当社の営業所/サービスの所在地・電話番号は、この取扱説明書のうら表紙に記載してあります。なお、修理をご依頼になる場合には、故障の発生状況・症状等を具体的にお知らせください。

●お願い

正しい操作方法をご理解いただくために、お手数でも取扱説明書は最後までお読みくださるようお願いいたします。操作方法に誤りがあると、本製品の性能が十分に発揮できないばかりでなく、思わぬトラブルや故障の原因になることがあります。

操作方法の誤りが原因で故障を生じた場合には、保証期間中でも有償扱いにさせていただきますので、ご注意ください。

●アフターサービス

◎保証期間はお買い上げの日より1ヵ年です。

本製品には保証書が添付されています。お買い上げいただいた日から1年以内に、取扱説明書に従った正常な使用状態で故障した場合には、無料で修理をお引き受けします。

◎保証書は大切に保管してください。

保証書を紛失しますと、保証期間中に発生した故障でも、保証期間が経過したものとして有償扱いにさせていただきますのでご了承ください。

また、販売年月日・販売店名等の必要事項が記入していない保証書も無効扱いにさせていただきますので、お買い上げいただきました販売店名・お買い上げ年月日等が正しく記入されていることをご確認のうえ、大切に保管してください。

◎保証期間が経過したあとに故障が生じた場合は、ご相談ください。

修理により機能が維持できる場合には有償で修理させていただきますので、お買い上げいただきました販売店または最寄りの当社営業所/サービスにご相談ください。

◎梱包箱も大切に保管してください。

修理や点検のために本製品を運搬する場合は、運搬中の事故やトラブルを防止するため、梱包箱を使用して運搬してください。

●ご愛用者カード

本製品には保証書の他に“ご愛用者カード”も添付しております。今後の製品開発の参考に致しますので、お手数でも必要事項をご記入の上お送りください。

製品の改良のため、取扱説明書の写真などが一部製品と異なることがあります。あらかじめご了承ください。

目次

ご注意	2	◎オーダー呼び出し操作	36	●DTMFモードの解除	69
安全上のご注意	2	●メモリーモード時の付属機能	36	バッテリーセーブ運用	70
取り扱い上のご注意	3	◎メモリーチューン機能	36	VOX運用	71
ご使用の前に	4	◎メモリーチャンネルクリア操作	37	VOXディレータイムの変更操作	72
アンテナについて	4	●メモリーチャンネル運用の解除	37	ビーブ機能	73
電源について	4	コールチャンネル操作	38	ロック機能	74
外部電源使用時の注意事項	5	●コールチャンネルの呼び出し操作	38	時計機能	75
付属品&オプション	6	◎コールチャンネルセット	38	●時計機能の“ON/OFF”操作	75
付属品	6	◎シンプルックス・セット	38	●時刻の合わせかた	76
オプション	6	◎セミデュプレックス・セット	39	●ONタイマー機能	77
本体上面部の説明	7	●ワンタッチリコール	39	●OFFタイマー機能	78
本体前面部の説明	8	(コールチャンネル運用の解除)	39	●タイマーアラーム機能	79
本体側面部の説明	9	スキャンコントロール	40	オートマッチックパワーオフ (APO) 機能	80
本体側面部の説明	9	2種類のスキャンストップモード	40	セットモード	82
基本編 (使いかた)	11	スキャンストップモードの選択操作	40	●セットモードへの移行方法	82
準備	12	●VFO 周波数スキャン	41	●ページャー運用時の	
●電池の入れかた	12	●メモリーチャンネルスキャン	42	送信ディレータイムの切り換え操作	82
●電池ケースの取り付け/取り外しかた	13	◎メモリーチャンネルスキャンコントロール	42	●呼び出し音の回数変更操作	83
●バックアップ用電池		◎メモリーチャンネルスキャンスキップ	43	●ダイヤルロック機能の“ON/OFF”操作	84
(リチウム電池)の取り付けかた	13	●プログラマブルメモリスキャン (PMS) 操作	44	●BUSYインジケータの“ON/OFF”操作	85
●付属アンテナ“YHA-29”の		ダイレクトPMS操作	45	●ページャー自動応答機能の“ON/OFF”操作	86
取り付け/取り外しかた	15	●オルタネートスキャン	45	●ワンタッチページャー機能の	
●ベルトクリップの取り付けかた	15	●トンスケルチスキャン	46	“ON/OFF”操作	87
●ハンドストラップの取り付けかた	16	プライオリティ操作	47	●受信音の切り換え操作	88
受信操作	16	●VFOモード時のプライオリティ操作	47	●呼び出し音の確認操作	89
●電源の入れかた/切りかた	16	●メモリーモード時のプライオリティ操作	48	●レピーター運用時の	
電源“ON”時のアドバイス	17	●プライオリティ操作の解除	49	SQL OFFスイッチの動作変更操作	89
●受信音の調節	18	レピーター運用	49	●送信ホルド機能の“ON/OFF”操作	90
●運用周波数の設定操作	19	ARS機能の“ON/OFF”操作	51	●予告メロディー音の変更操作	90
●バンドの入れ換え方法	22	送信オフセット運用	52	●DTMFモニター音の変更操作	92
●VFOの切り換え方法	22	シフト幅の変更操作	54	●ビーブ音の変更操作	93
送信操作	24	トンスケルチ・ベル運用	55		
●送信しかた	24	●トンスケルチ運用	55	●1kHz 桁入力の“ON/OFF”操作	94
144/430MHz帯の使用区分について	25	●ベル運用	56	●DTMFコードの出力“ON/OFF”操作	95
●送信出力の設定方法	26	トーン周波数の選択操作	58	●呼び出し音の動作変更操作	96
IBS機能	28	ページャー運用	59	●呼び出し音の変更操作	97
V&V/U&Uデュアルレシーブ機能	29	●ページャーコードの設定	59	●DTMFコードの	
ステップ幅の設定操作	30	●待ち受け操作	62	送出スピードの切り換え操作	98
サブバンド表示の切り換え操作	31	●呼び出し操作	64	バックアップ機能	100
TX SAVE機能	32	◎ページャー呼び出し	64	故障かな?と思ったら	100
応用編 (各種の機能と操作)	33	◎コードスケルチ呼び出し	65	アマチュア無線局免許申請書類の書き方	102
メモリー操作	33	着呼禁止機能	66	定格	104
●メモリーセット	34	マニュアル操作による呼び出し方法	67	BLOCK DIAGRAM	105
◎シンプルックス・メモリー操作	34	DTMFモード	68	付録1	111
◎セミデュプレックス・メモリー操作	34	●DTMFメモリーセット	68	付録2	112
●メモリーチャンネルの呼び出し操作	35	●DTMFメモリーの呼び出し	69		
◎ダイレクト呼び出し操作	35				

ご使用いただく前に必ずお読みください。

安全上のご注意

- 本機の動作電圧範囲は、5.5～16.0Vです。外部電源を使用して運用するときには5ページの注意事項を良くお読みになって、過電圧や逆接続にならないよう、十分ご注意ください。
- 異常？と感じたときは、煙が出ている、変な臭いがする……などの故障状態のまま使用すると危険です。すぐに電源スイッチを切るとともに電池ケースや外部電源などを外し、お買い上げいただきました販売店または最寄りの当社サービスステーションへ修理をご依頼ください。
- セットの内部に触れることは、故障の原因になります。内部の点検・調整は、お買い上げいただきました販売店または最寄りの当社営業所/サービスにご依頼ください。
- 水がこぼれたときには、セットのそばに花瓶、化粧品、薬品、飲料水などの、水の入った容器を置かないでください。万一、内部に水が入った場合は、すぐに電源スイッチを切るとともに電池ケースや外部電源などを外し、お買い上げいただきました販売店または最寄りの当社営業所/サービスにご相談ください。
- バックアップ用電池(リチウム電池)は、お子様が飲み込んだりしないよう、取り扱いには十分ご注意ください。

万一、お子様が飲み込んだときには、直ちにお近くの医師または下記の(財)日本中毒情報センター(24時間体制)にご相談ください。

◎つくば中毒110番 ☎ 0298(52)9999

◎大阪中毒110番 ☎ 06(451)9999

取り扱い上のご注意

- 変形、変色、結露、破損などの事故を未然に防止するため、次のような場所でのご使用および保管はできるだけ避けてください。
 - 周囲温度が極端に高い場所、または極端に低い場所。
 - 寒い部屋から急に暖かい部屋への移動。
 - 暖房器具の近く。
 - 浴室などの湿気の多い場所。
 - 車のダッシュボードなどの直射日光の当たる場所。
 - 不安定な場所。
- TV・FM放送用送信アンテナの近くでは、放送電波の混入妨害が起こる場合がありますのでご注意ください。
- 無線中継所の近くでは、業務用無線通信に妨害を与える場合がありますのでご注意ください。
- 外部アンテナは、テレビアンテナや電灯線からなるべく離して設置してください。
- ケースが汚れたら、中性洗剤を湿した布などで軽く拭いて汚れを落とし、乾いた布で拭き取ります。シンナーやベンジンはケースを傷めますので、絶対に使用しないでください。

アンテナについて

本機のアンテナインピーダンスは、50Ω系の負荷に整合するように設計してあります。したがって、付属のアンテナでなくても、アンテナ端子に接続する点のインピーダンスが50Ωの144MHz/430MHz帯用アンテナであれば、どのような型式のアンテナでも使うことができます。

なお、外部アンテナを使用するときには良質の50Ω系同軸ケーブルを使用し、本機とアンテナの間を最短距離で接続してください。

電源について

本機には、付属の電池ケース(**FBA-12**)の他に、オプションで各種のNi-Cd電池パックを用意しておりますので、運用時間や使用目的にあわせてご使用ください。

また、本機には外部電源入力端子(**EXT DC**)がありますので、外部電源(**DC5.5V～16.0V**)を使用して運用することもできます。なお、外部電源を使用して運用するときには次ページの注意事項を良くお読みになり、過電圧、逆接続等に十分注意して運用してください。

また、電源電圧が**5.5V**以下になると、減電圧警告機能が動作してディスプレイに運用周波数と電源電圧を交互に表示し、電源電圧が低下したことを知らせます。

なお、電源電圧が低下すると、ディスプレイの表示が薄くなったり、送信出力が低下したりして、本機の性能を十分に発揮できなくなりますので、電池の交換や充電または電源回路の点検等を行なってください。



電池を交換するときには、必ず6本とも同じ種類の新しい電池に交換してください。古い電池や種類の異なる電池と混用すると、電池の寿命が短くなってしまいます。また、**FBA-12**はマンガン電池およびアルカリ電池用の電池ケースです。**Ni-Cd電池は絶対に使用しないでください。**

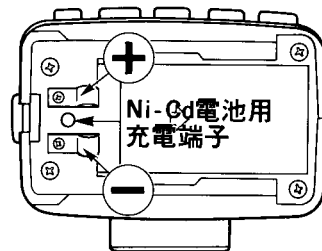
外部電源使用時の注意事項

- 本機に接続する外部電源は、必ず出力電圧が**5.5～16.0V**の範囲内にある直流電源を使用してください。
- 本機に外部電源を接続する場合には、必ずオプションの外部電源ケーブル“**E-DC-6**”またはノイズフィルター付き外部電源ケーブル“**E-DC-5B**”を使用し、本体上面部にある**EXT DC**端子に直接接続してください。なお、**E-DC-6**を使用するときには事故防止のため、必ずヒューズ(3A)を併用してください。また、**E-DC-6**の極性は、ケーブルの**赤/黒線がプラス(+)**、**黒線がマイナス(-)**です。
- オプションのNi-Cd電池パックを取り付けているときに外部電源を接続すると、自動的にNi-Cd電池パックにも充電されます(ただし、12V型のNi-Cd電池パック“**FNB-27**”は補充電程度)。Ni-Cd電池パックの過充電により発生する事故を未然に防止するため、Ni-Cd電池パックを取り付けたときには、15時間以上外部電源で運用しないでください。なお、Ni-Cd電池パックを標準充電するためには、それぞれのNi-Cd電池パックの端子電圧に対して、数V高い電圧が取り出せる外部電源が必要です。

◎端子電圧が**7.2V**の**FNB-25/-26/-28**を標準充電する場合には出力電圧**10V**以上。

◎端子電圧が**12V**の**FNB-27**を標準充電する場合には出力電圧**15V**程度の外部電源が必要になります。

- **FBA-12**(マンガ電池およびアルカリ電池用の電池ケース)を装着したときには、**EXT DC**端子から外部電源を供給しても、充電回路は動作しない構造になっています。
- 車のバッテリーから電源を取る場合には、ノイズの混入防止の面から、ノイズフィルター付き外部電源ケーブル“**E-DC-5B**”を使用してください。なお、シガレットライター用ソケットから電源を取る場合には、接触不良を起こさないようご注意ください。
- 外部電源ケーブルの抜き差しは、必ず電源“**OFF**”の状態で行ってください。



付属品

●アンテナ	YHA-29 (Q3000085)	1	●ハンドストラップ (S6000296)	1
●リチウム電池	CR1220 (Q9000573)	1	●ベルトクリップ (R0517430)	1
●電池ケース	FBA-12 (A02840001 : ブラック) または (A02840005 : ダークブルー)			1

オプション

- FNB-25 : 7.2V, 600mAh Ni-Cd電池パック
- FNB-26 : 7.2V, 1000mAh Ni-Cd電池パック
- FNB-27 : 12V, 600mAh Ni-Cd電池パック
- FNB-28 : 7.2V, 700mAh Ni-Cd電池パック
- NC-18A : FNB-27用標準充電器
- NC-28A : FNB-25/28用標準充電器
- NC-34A : FNB-26用標準充電器
- NC-42 : 急速充電器
- MH-12_{A2B} : スピーカーマイク
- MH-18_{A2B} : 超小型防滴スピーカーマイク
- MH-19_{A2B} : イヤピース/マイクロホン
- MH-29_{A2B} : リモコンスピーカーマイク
- YH-2 : ヘッドセット
- MMB-54 : モービルハンガー
- E-DC-6 : 外部電源ケーブル
- E-DC-5B : ノイズフィルター付き外部電源ケーブル
- CSC-56 : FBA-12/FNB-25用ソフトケース
- CSC-57 : FNB-28用ソフトケース
- CSC-58 : FNB-26/27用ソフトケース
- BC-1 : ポトムカバー

① ANT

アンテナ接続用のBNC型コネクターです。

② EXT DC

本機を外部電源で動作させるときに使用する端子です。また、オプションのNi-Cd電池パックを使用しているときには、この端子から充電することができます。

なお、この端子に外部電源を接続するときには、必ずオプションの外部電源ケーブル“E-DC-6”またはノイズフィルター付き外部電源ケーブル“E-DC-5B”を使用してください。



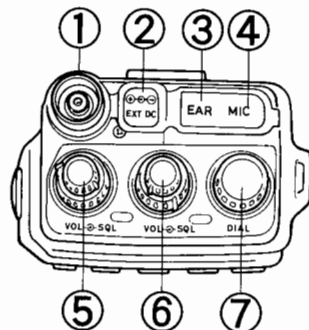
EXT DCジャックは特殊ジャックを使用していますので、E-DC-6またはE-DC-5B以外のプラグは絶対に差し込まないでください。

③ EAR

イヤホンまたは外部スピーカー(4Ω~16Ω)を接続するためのジャックです。なお、ここにイヤホンまたは外部スピーカーを接続すると、キーボードの操作により内蔵スピーカーの動作を止めたり、任意のバンドの音声出力を、内蔵スピーカーまたは外部スピーカーに出力することができます。(詳しくは、88ページの“受信音の切り換え操作”をご覧ください。

④ MIC

外部マイクロホン接続のためのジャックです。EARジャックと併用し、オプションのリモコンスピーカーマイク“MH-29A2B”などを接続して運用します。



⑤ VHF VOL ⇄ SQL

◎ VOL

144MHz帯の受信音量を調節するつまみです。

◎ SQL

144MHz帯に受信信号の入感がないときに出る、ノイズを消すためのつまみです。

⑥ UHF VOL ⇄ SQL

◎ VOL

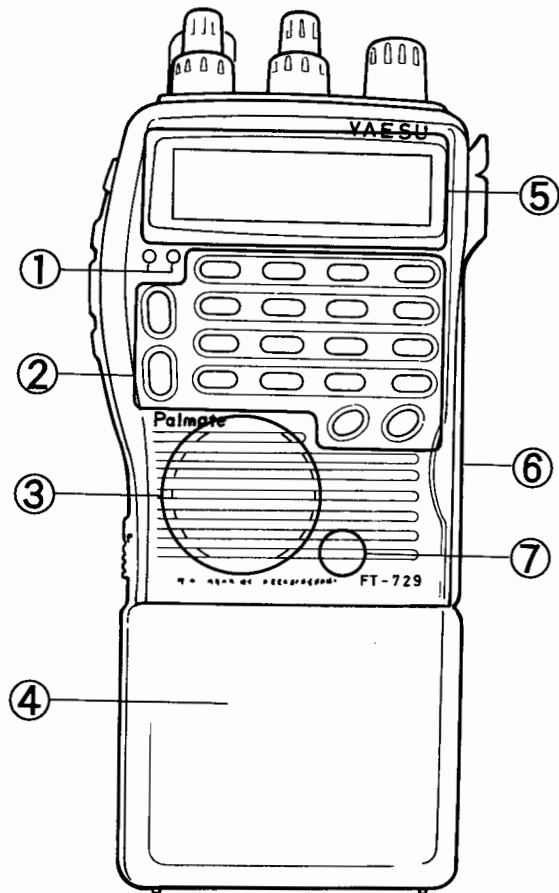
430MHz帯の受信音量を調節するつまみです。

◎ SQL

430MHz帯に受信信号の入感がないときに出る、ノイズを消すためのつまみです。

⑦ DIAL

運用周波数の設定やメモリーチャンネルの選択などを行なうつまみです。



① BUSY/TXインジケータ

本機の送受信状態を、144MHz帯と430MHz帯とを個別に表示するLEDです。受信信号が入感しているときには緑色、送信状態のときには赤色に点灯します。

② キーボード

運用周波数の設定やメモリー操作・スキャン操作などの、各種の操作を行なうキーボードです。

③ スピーカー

内蔵スピーカーの位置です。

④ 電池ケース

単3型乾電池を6本収納し、本体から取り外しができる電池ケースです。

⑤ ディスプレイ

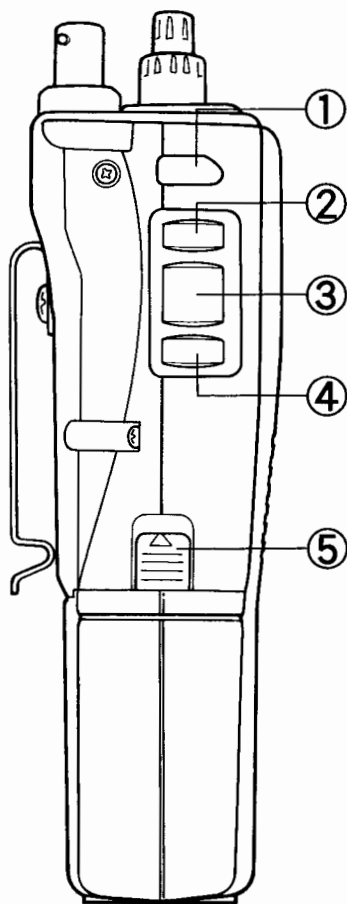
運用周波数や各種の動作状態を表示する液晶表示器です。



⑥ BACKUP用電池ホルダー

バックアップ用電池(CR1220型リチウム電池)の取付位置です。

⑦ マイクロホン

内蔵マイクロホンの位置です。送信するときには、ここに向かって話しかけます。



- ① POWER**
 本機の電源を“ON/OFF”するスイッチです。
 このスイッチをワンタッチで押すと電源“ON”、
 0.5秒以上押し続けると電源“OFF”になります。
- ② SQL OFFスイッチ**
 本機のスケルチ回路（ノイズスケルチ、トーンスケルチおよびコードスケルチ）の動作を一時的に解除するスイッチです。
 また、時刻表示をしているときにこのスイッチを押すと、このスイッチを押している間だけ“分・秒”を表示するようになります。
- ③ PTTスイッチ**
 メインバンドの送受信状態を切り換えるスイッチです。このスイッチを押すとメインバンドが送信状態になり、離すと受信状態に戻ります。
- ④ LAMPスイッチ**
 キーボードとディスプレイの照明用ランプスイッチです。このスイッチをワンタッチで押すと照明ランプが点灯し、約5秒後に自動的に消灯します。
 また、キーボードの  キーを押した後に続けてこのスイッチを押すと、ランプは連続点灯するようになります。なお、もう一度同じ操作（ キーを押した後に続けてこのスイッチを押す）を行なうと、照明ランプは消灯します。
- ⑤ UNLOCKレバー**
 電池ケースを外すときに操作するレバーです。

NOTE

基礎編

(使いかた)

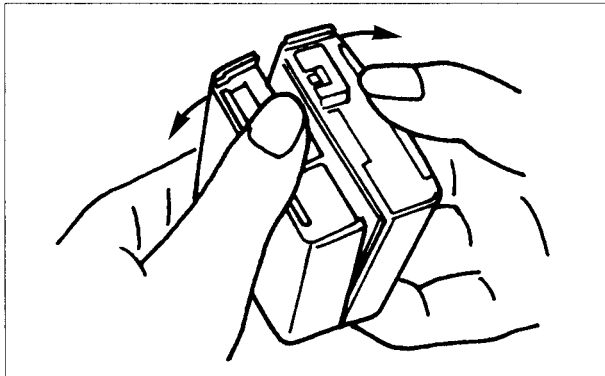
**とにかく早くFT-729を使いたい！
と思うあなたに！**

準備	12
受信操作	16
送信操作	24

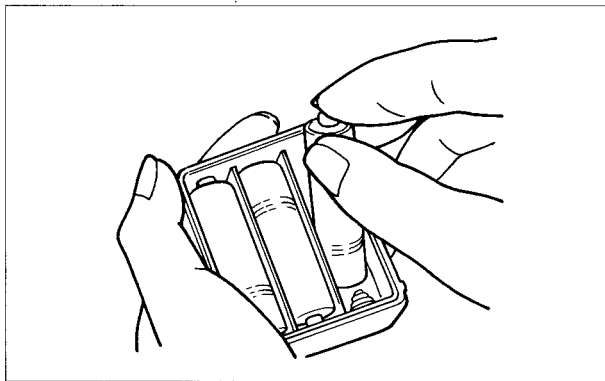
準備

●電池の入れかた

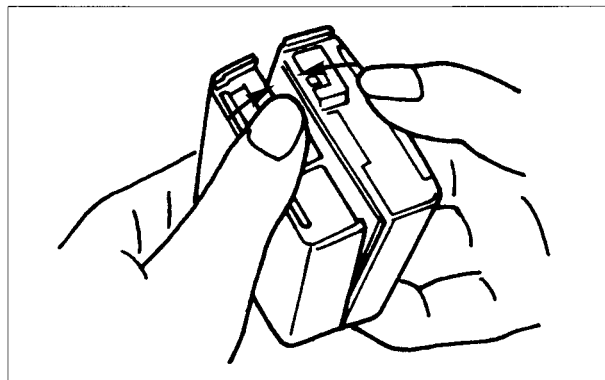
1. 電池ケース“FBA-12”を前後方向に開きます。




2. 単3型乾電池6本を、極性を間違えないように注意して、指定通りに電池ケースに挿入します。



3. 電池ケース底面部にある、ツメとくぼみを合わせて電池ケースを元通りにします。



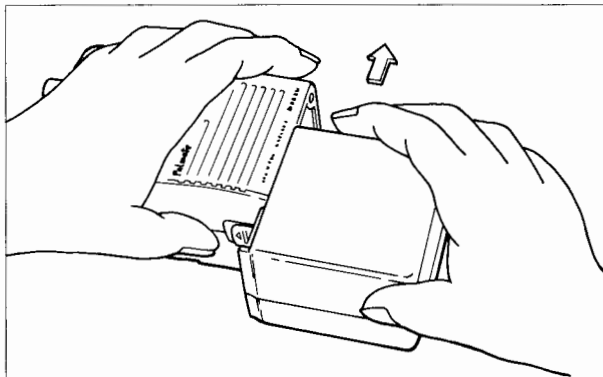
 電池ケースに電池を入れるときには、必ず6本とも同じ種類の新しい電池を使用してください。

古い電池や種類の異なる電池と混用すると、電池の寿命が短くなります。

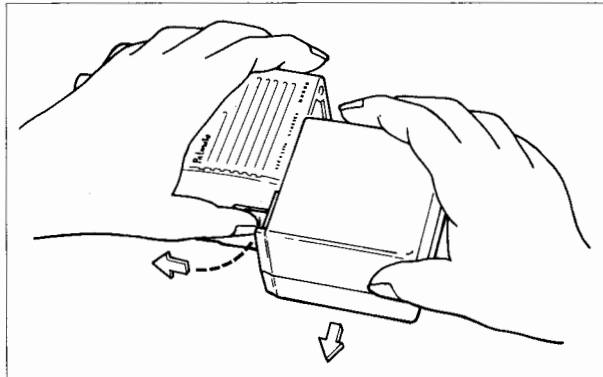
また、**FBA-12**はマンガン電池およびアルカリ電池用の電池ケースです。 **Ni-Cd電池は絶対に挿入しないでください。**

●電池ケースの取り付け/取り外しかた

1. 本体底面の溝と電池ケースの溝を合わせ、矢印の方向にスライドさせて取り付けます。



2. 電池ケースを本体から取り外すときには、本体側面にある**UNLOCK**レバーを▲印の方向に押し上げながら電池ケースを手前にスライドさせて外します。



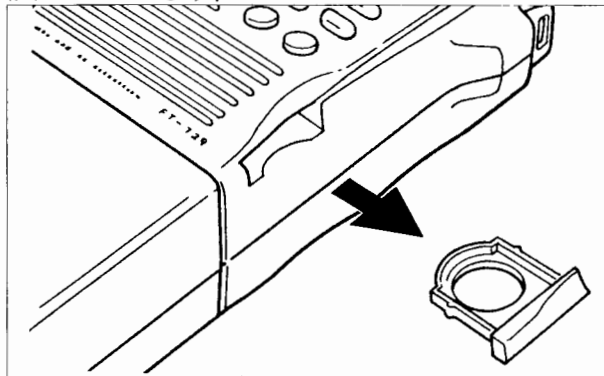
●バックアップ用電池（リチウム電池）の取り付けかた

1. **BACKUP**用電池ホルダーを引き出します。

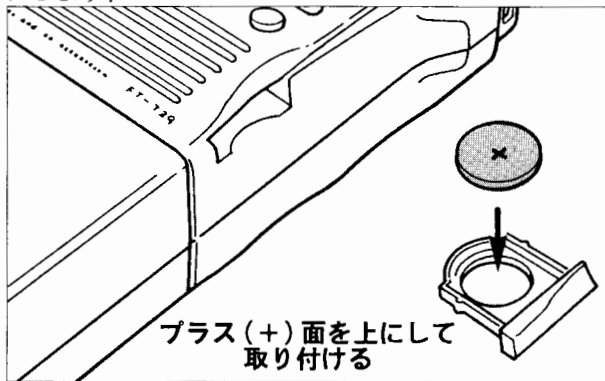


リチウム電池の取り付け・交換を行なうときには、必ず電源を接続した状態で行ってください。

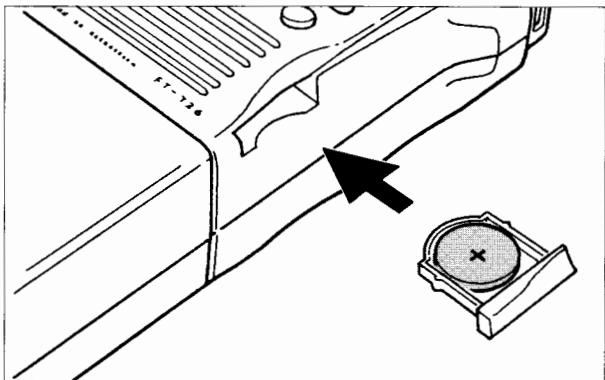
電源を接続しないで行なうと、メモリーデータが失われてしまいます。



2. リチウム電池 (CR1220) のプラス (+) 面を上にして、BACKUP用電池ホルダーにリチウム電池をセットします。



3. 本体にBACKUP用電池ホルダーを、元通りに取り付けます。



○お子様が飲み込んだりしないよう、リチウム電池の取り扱いには十分ご注意ください。

○火中に投げたり、分解や充電などは絶対に行わないでください。

○金属性のピンセットなどでつかまないでください。

アドバイス

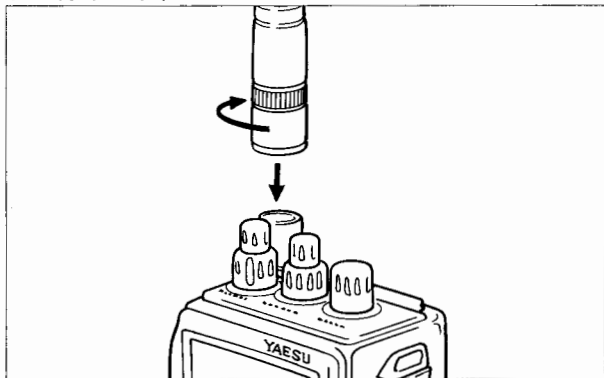
リチウム電池の寿命は、一般的な取り扱いかた[※]で約1年です。本体に電池ケース等の電源を接続しないと、リチウム電池の寿命は短くなりますのでご注意ください。

なお、大切なメモリーデータを失わないために、早めの電池交換をおすすめします。

注：新しい乾電池が入っている電池ケースまたは十分に充電されたNi-Cd電池パックが取り付けられている状態。

●付属アンテナ“YHA-29”の取り付け/取り外しかた

付属のアンテナ“YHA-29”を取り付けるときには、アンテナ底面部の溝をアンテナ端子の凸部に合わせて差し込み、アンテナの根元を時計（右）方向にまわして取り付けます。

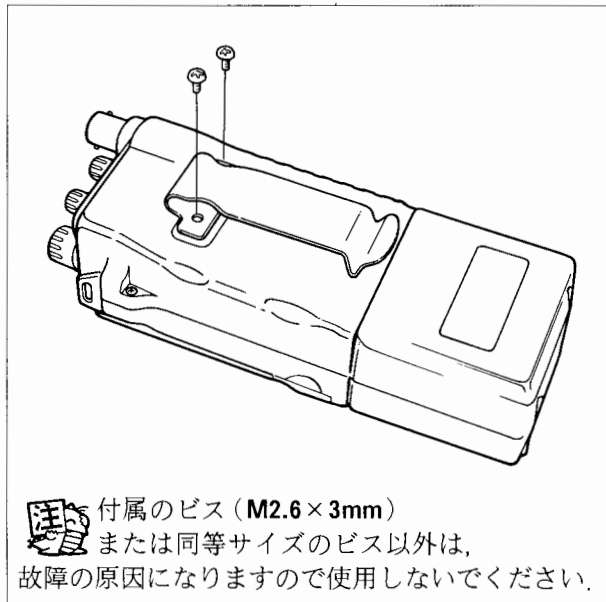


アドバイス

アンテナを外すときには、アンテナの根元を反時計（左）方向にまわせば、簡単に取り外せます。

●ベルトクリップの取り付けかた

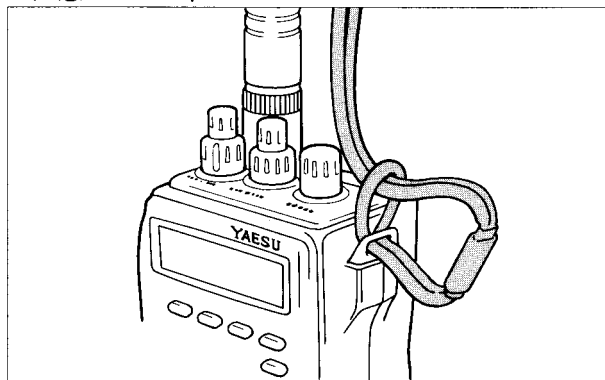
付属のベルトクリップは下図に示すように、本体背面に取り付けてある2本のビス（M2.6×3mm）を利用して取り付けます。



付属のビス（M2.6×3mm）
または同等サイズのビス以外は、
故障の原因になりますので使用しないでください。

●ハンドストラップの取り付けかた

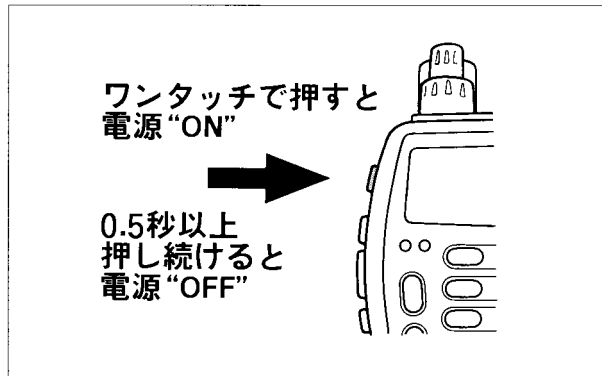
付属のハンドストラップは下図に示すように、本体右側にある取り付け穴に通して使用します。間違った取り付けかたをして、ハンドストラップが外れないようご注意ください。



受信操作

●電源の入れかた/切りかた

電源を入れるときには、本体側面にあるPOWERスイッチをワンタッチで押します。また、POWERスイッチを0.5秒以上押し続けると、電源が切れます。



購入後、最初に電源を入れたときには、右に示すよう



な表示がディスプレイに現れ、430.00MHzのVFO Aがメインバンド、144.00MHzのVFO Aがサブバンドに設定され、メインバンドの周波数とサブバンドの周波数を同時に受信することのできる、クロスバンド・フルデュプレックス・デュアル受信運用が行なえます。

- ◎ 本機では、内蔵する2つのバンドのうち、送信操作が行なえる方のバンドを“メインバンド”と呼び、受信操作しかできない方のバンドを“サブバンド”と呼びます。

また、メインバンドには周波数表示の左側に“▶”表示が点灯し、現在メインバンドに指定してあることを表示します。

なお、本機の、メインバンドとサブバンドは、サブバンドでスキャン操作を行ないながらメインバンドでレピーター運用を行なうように、メインバンドとサブバンドを個別に独立して、異なる操作を同時に行なうことができます。

また、メインバンドとサブバンドの入れ換え方法は、22ページの“バンドの入れ換え方法”をご覧ください。

- ◎ 本機には、144MHz帯、430MHz帯ともに**VFO A**、**VFO B**の2つのVFOを内蔵しています。また、**VFO A**または**VFO B**を使用して運用することを“**VFOモード**”と呼びます。なお、**VFO**の切り換え方法は、22ページの“**VFOの切り換え方法**”をご覧ください。
- ◎ 本機では、クロスバンド・フルデュプレックス・デュアル受信運用の他に、送受信操作ともメインバンドの周波数で行なうモノバンド運用を行なうこともできます。

詳しくは、23ページの“モノバンド運用”をご覧ください。

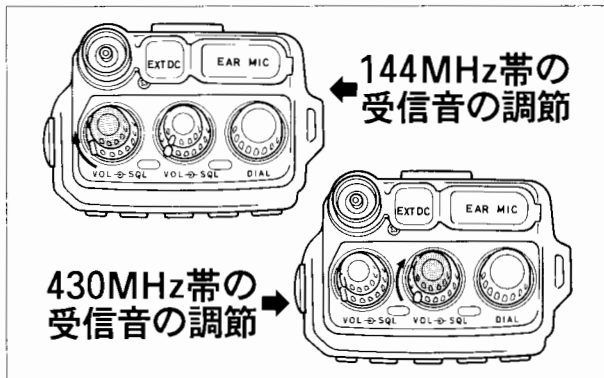


本機をモノバンド機として使用するときには、同時送受信操作はできません。

- ◎ クロスバンド・フルデュプレックス・デュアル受信運用を行なっているときには、**IBS機能**（28ページ参照）を動作させておけば、サブバンドに交信したい局が現れたときやサブバンドで呼び出しを受けたときに、すみやかにその局と交信することができるようになります。
- ◎ クロスバンド・フルデュプレックス・デュアル受信運用を行なっているときに、430MHz帯に144MHz帯の周波数を設定すれば**V&V受信**、144MHz帯に430MHz帯の周波数を設定すれば**U&U受信**を行なうことができます。詳しくは、29ページの“**V&V/U&Uデュアルレシーブ機能**”をご覧ください。
- ◎ 工場出荷後、はじめて電源を入れると、上記に示した運用状態に設定されますが、つぎに電源を入れるときにはバックアップ機能により、電源を切る前に設定した状態を表示するようになります。
- ◎ 本機に内蔵してある時計機能を利用して、自動的に電源を“**ON/OFF**”することもできます。詳しくは75ページの“**時計機能**”をご覧ください。

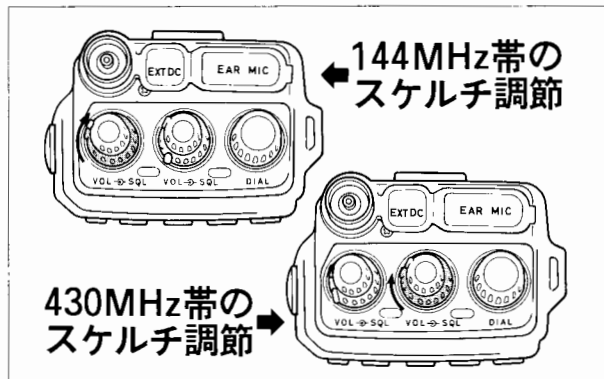
●受信音の調節

1. 144MHz帯の受信音はVHF VOLツマミ、430MHz帯の受信音はUHF VOLツマミで調節します。



VHF VOLツマミおよびUHF VOLツマミは、時計(右)方向にまわすほど音量が大きくなりますので、適当な音量になるよう調節します。

2. 表示した周波数に運用中の局がないときには“ザー”というFM特有のノイズが聞こえますので、VHF SQLツマミとUHF SQLツマミをまわして、このノイズが消える位置にセットします。





アドバイス ◎ SQLツマミをまわして、ノイズが消える位置を“スレッシュールド・ポイント”と呼びます。なお、スレッシュールド・ポイントの位置では、TX/BUSYインジケータの緑色表示は消灯します。

- ◎ 本機のTX/BUSYインジケータは、電池の消耗を極力少なくするため、受信信号の入感があっても点灯しないようにすることができます。詳しくは85ページの“BUSYインジケータの“ON/OFF”操作”をご覧ください。

●運用周波数の設定操作

運用周波数の設定操作には、下記に示すように



- ◎ **DIAL TUNING**
DIALつまみによる設定方法
- ◎ **UP/DOWN TUNING**
キーボードの  /  キーによる設定方法
- ◎ **DIRECT TUNING**
キーボードの数字キーにより、周波数を直接設定する方法

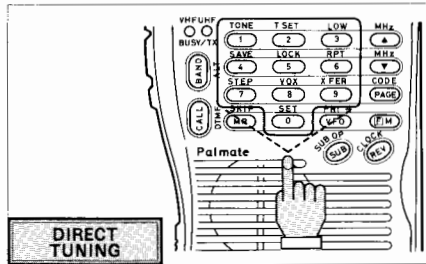
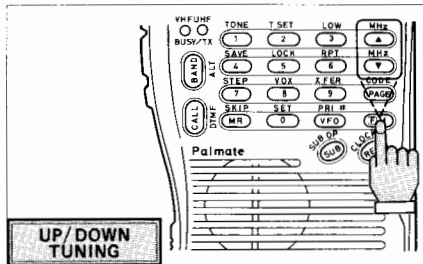
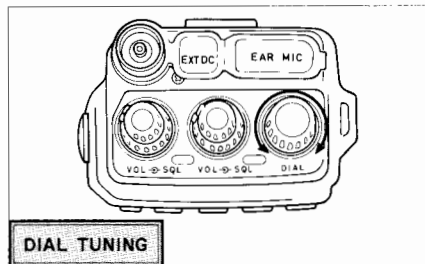
の3種類の方法がありますので、そのときの状況に合わせて使い分けてください。

アドバイス

設定した周波数は、簡単な方法でメモリーチャンネルまたはコールチャンネルに登録して運用することができます。詳しくは、34ページの“メモリー操作”または38ページの“コールチャンネル操作”をご覧ください。

サブバンド

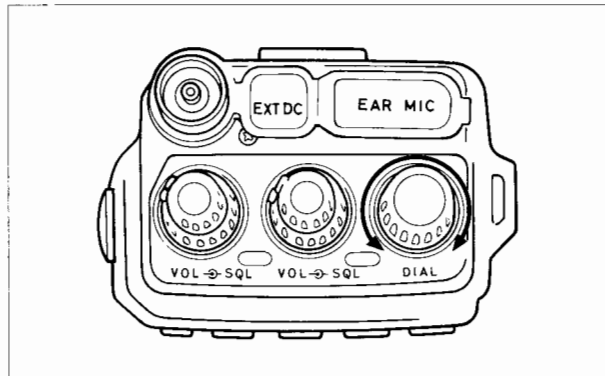
サブバンドの運用周波数を設定するときには、まず初めにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行ってください(サブバンドオペレーション)。



DIAL TUNING

DIALツマミは、時計(右)方向にまわすと1ステップずつ運用周波数が高くなり、反時計(左)方向にまわすと1ステップずつ運用周波数が低くなります。

また、キーボードの **[FM]** キーをワンタッチで押して、ディスプレイに **"F"** の表示が点灯している間(約5秒間)にDIALツマミをまわすと、1MHzずつ運用周波数を変化させることができます。

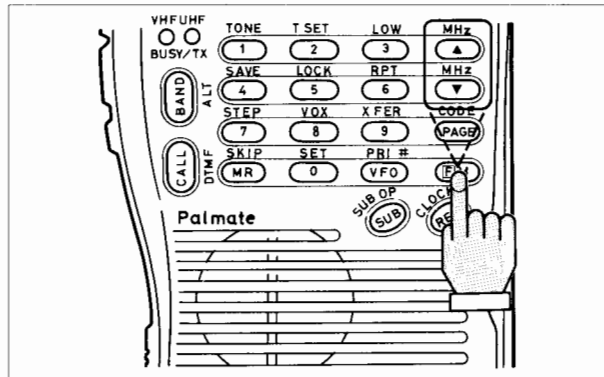


アドバイス 1ステップの周波数変化量(ステップ幅)は、5/10/12.5/15/20/25/50kHzの内から1つを選択することができます(工場出荷時には、144MHz帯および430MHz帯のVFO A/Bに20kHzが設定してあります)。詳しくは、21ページの“ステップ幅の設定操作”をご覧ください。

UP/DOWN TUNING

キーボードの **[MHZ ▲]** / **[MHZ ▼]** キーをワンタッチで押すと、1ステップずつ運用周波数がそれぞれの方向に変化します。

また、DIALツマミと同様に、キーボードの **[FM]** キーをワンタッチで押して、ディスプレイに **"F"** の表示が点灯している間(約5秒間)に **[MHZ ▲]** / **[MHZ ▼]** キーを押すと、1MHzずつ運用周波数を変化させることができます。



アドバイス ① 1ステップの周波数変化量は、DIALツマミのステップ幅と同じです。
 ② **[MHZ ▲]** / **[MHZ ▼]** キーは押し続けると、スキャン動作を開始します。詳しくは、40ページの“スキャンコントロール操作”をご覧ください。

DIRECT TUNING

キーボードの数字キーで、運用周波数を直接設定することができます。なお、キー入力のしかたは設定してあるステップ幅により若干異なり、つぎのようになっています。また、バンド外の周波数など、キー入力が無効なときには、“ピピッ”と電子音を発してキー入力する前の周波数に戻ります。

【ステップ幅：5/10/15kHzのとき】



例 433.860MHzに設定するとき。

キーボードより、

SAVE (4) - **LOW** (3) - **LOW** (3) - **VOX** (8) - **RPT** (6) - **SET** (0)

と100MHzの桁から1kHzの桁まで順に入力して行きます。



1kHzの桁のキー入力は、**LOCK** (5) と **SET** (0) 以外のキーは受け付けません。

【ステップ幅：20kHzのとき】



例 433.860MHzに設定するとき。

キーボードより、

SAVE (4) - **LOW** (3) - **LOW** (3) - **VOX** (8) - **RPT** (6)

と100MHzの桁から10kHzの桁まで順に入力して行きます。

アドバイス

145.00MHzの周波数を設定するように、ある桁以下の周波数が“0”のときには、**PRI** / **VFO** キーを押して、周波数の設定を省略することができます。

【(例1)】145.00MHzの周波数を設定するとき。

TO (1) - **SAVE** (4) - **LOCK** (5) - **PRI** / **VFO**

【ステップ幅：12.5/25kHzのとき】



例 433.8625MHzに設定するとき。

キーボードより、

SAVE (4) - **LOW** (3) - **LOW** (3) - **VOX** (8) - **RPT** (6)

と100MHzの桁から10kHzの桁まで順に入力して行きます。

10kHzの桁を入力すると、1kHzの桁と100Hzの桁が自動的に設定され、キー入力が完了します。



1kHzの桁のキー入力は、**SAVE** (4) と **XFER** (9) キーは受け付けません。

【ステップ幅：50kHzのとき】



例 433.850MHzに設定するとき。

キーボードより、

SAVE (4) - **LOW** (3) - **LOW** (3) - **VOX** (8) - **LOCK** (5)

と100MHzの桁から10kHzの桁まで順に入力して行きます。



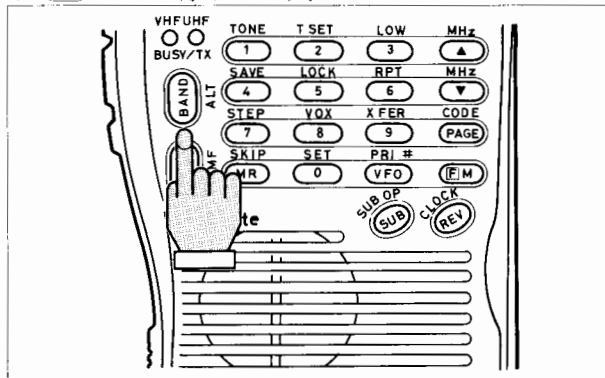
10kHzの桁のキー入力は、**T SET** (2) / **LOCK** (5) / **STEP** (7) / **SET** (0) 以外のキーは受け付けません。

【(例2)】435.20MHzの周波数を設定するとき。

SAVE (4) - **LOW** (3) - **LOCK** (5) - **T SET** (2) - **PRI** / **VFO**

●バンドの入れ換え方法

メインバンドとサブバンドの入れ換えは、キーボードの **ALT BAND** キーで行ないます。



キーボードの **ALT BAND** キーを押すとディスプレイの「▶」

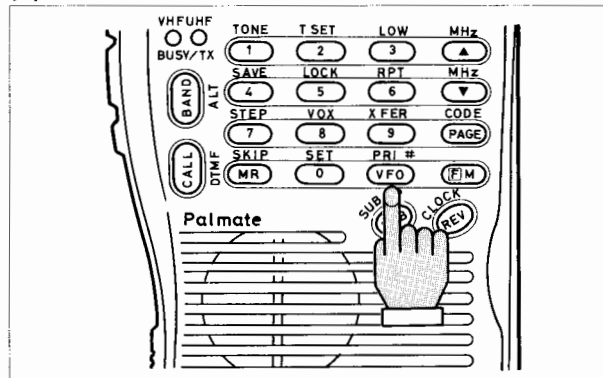


表示が反対側のバンドに移り、メインバンドとサブバンドが入れ換わります。

ALT BAND キーは押すたびに、メインバンドとサブバンドの関係が交互に切り換わりますので、送信しようとする周波数がメインバンド（「▶」表示が点灯）になるようにします。

●VFOの切り換え方法

VFOの切り換えは、キーボードの **PRI VFO** キーで行ないます。



キーボードの **PRI VFO** キーは押すたびに、使用するVFOがVFO B → VFO A → VFO B …… と交互に切り換わりますので、どちらか希望するVFOに設定します。



アドバイス

本機に内蔵してある4つのVFO(144MHz帯のVFO(A/B)と430MHz帯のVFO(A/B))は、完全に独立していますので、異なる運用周波数や異なるステップ幅などを個別に設定することができます。

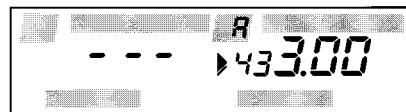
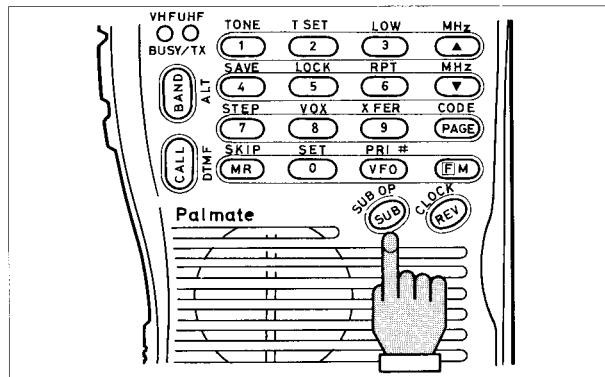
サブバンド

サブバンドのVFOを切り換えるときには、まず最初にキーボードの **(FM)** キーと **(SUB)** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

●モノバンド運用

送受信操作ともメインバンドの周波数で行なう運用方法です。(サブバンドの動作が一時的に停止します。)

1. キーボードの **(SUB)** キーを押すとサブバンドの表示が消え、“モノバンド運用”になります。



2. 再度 **(SUB)** キーを押すと、クロスバンド・フルデュプレックス・デュアル受信運用(工場出荷時の状態)に戻ります。

アドバイス

モノバンド運用時には、31ページの“サブバンド表示の切り換え操作”により、サブバンドの表示を“ブランク(---)表示/時計表示/バッテリー電圧表示”の内からいずれか一つを選んで、表示させることができます。

送信操作

受信ができましたら送信操作に移ります。



◎ 送信するときには必ず、アンテナかダミーロードを接続して行ない、決して無負荷で送信しないように十分ご注意ください。

◎ 電波の発射にはすでに行なわれている他の通信に妨害を与えないよう、運用中の局を呼び出すとき以外は送信をしようとする周波数を良く受信して、妨害しないことを確かめてから送信してください。

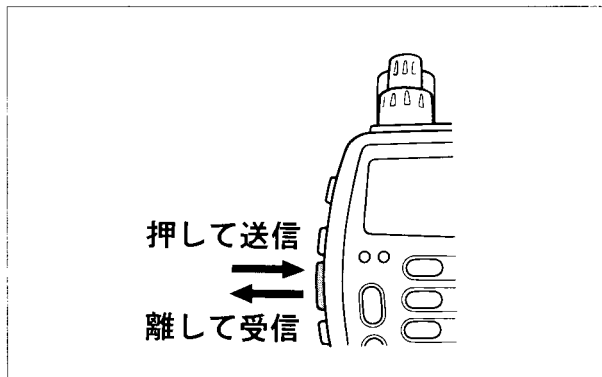
◎ バンドの下端(144.00MHzおよび430.00MHz)と上端(146.00MHzおよび440.00MHz)では、オフバンドになりますので絶対に送信しないでください。

◎ フルデュプレックス運用を行なうときには、ハウリング防止のため、イヤホンまたはオプションのイヤピースマイクロホン“MH-19_{A2B}”をご使用ください。また、435.00MHzの周波数を受信しながら145.00MHzの周波数で送信するように、送信周波数と受信周波数が高調波関係になる周波数では運用しないでください。

◎ 本機を最大パワー(5W)で長時間送信を続けると、過熱防止回路が働いて、ディスプレイに“LOW”の表示が点滅するとともに送信出力が自動的にLOWパワーに下がります。また、過熱防止回路が働いている状態でさらに送信を続けると、強制的に受信状態に戻り、セット内部の温度上昇による故障を未然に防ぎます。なお、本機が過熱防止回路により強制的に受信状態になったときには、“本機の電源を“OFF”にする”か“少しの間受信状態を保つ”かして本機を少しの間休ませてください。

●送信のしかた

PTTスイッチを押すとメインバンドに指定しているバンド(VHFまたはUHF)のBUSY/TXインジケータが赤色に点灯して、メインバンドが送信状態に切り換わり、サブバンドの周波数を受信しながらメインバンドの運用周波数で送信できる、同時送受信操作のフルデュプレックス運用が行なえます。



PTTスイッチを押した状態でマイクに向かって送話すれば、通話ができます。また、PTTスイッチを離すとメインバンドも受信状態に戻ります。

アドバイス

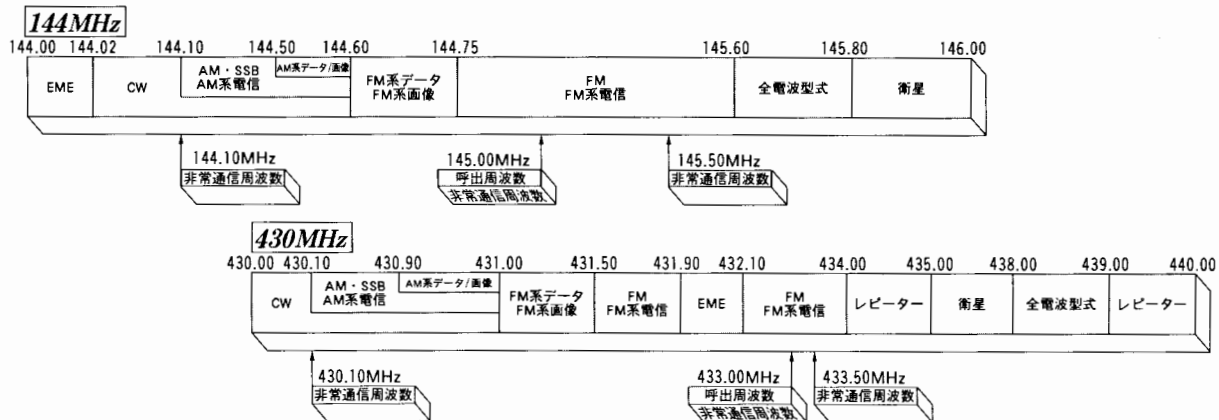
◎ PTTスイッチを使わずに、音声により自動的に送信・受信を切り換えることもできます。詳しくは、71ページの“VOX運用”をご覧ください。

◎ 本機では誤送信を防ぐため、PTTスイッチを電氣的にロックすることができます。詳しくは、74ページの“ロック機能”をご覧ください。

144/430MHz帯の使用区分について

平成4年5月14日付け郵政省告示第316号によってバンド内の使用区分が定められましたので、平成4年7月1日よりこのルールに従って144MHz帯および430MHz帯を運用してください。

この告示の中で144MHz帯および430MHz帯に関する部分を下記に示します。



●送信出力の設定方法

近距離通信の場合には、送信出力をローパワーにして電池の消耗を防ぎます。

1. キーボードの **[EM]** キーと **[3]** キーを続けて順に押すと、下に示すような表示がディスプレイに約2秒間現れますので、その間に下表を参考に、**DIAL** ツマミまたはキーボードの **[▲]** / **[▼]** キーを操作して、希望する送信出力に設定します。

<左まわし (**[▼]** キー) (**[▲]** キー) 右まわし >

……L3 ↔ L1 ↔ L2 ↔ L3 ↔ L1……

L1	0.5W	L3	3W
L2	1.5W	HI	5W
電源電圧13.8V時			

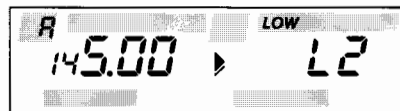


2. 設定終了後、**PTT** スイッチを押すか、そのまま約2秒間経過すると、自動的にディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、送信出力がローパワーになります。

アドバイス

ローパワー時には、ディスプレイに“LOW”の表示が点灯します。

3. もう一度 **[EM]** キーと **[3]** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“HI”の表示を約2秒間表示して、送信出力がハイパワーに戻ります。



アドバイス

ディスプレイ内の**S&PO**メーター表示は、送信出力の違いにより、送信時に点灯する位置がそれぞれ異なります。

サブバンド

本機では、サブバンドの周波数で送信することはできませんが、メインバンドで運用するときのために、サブバンドに対しても、送信出力の設定操作が行なえます。なお、サブバンドに設定してあるバンドの送信出力を設定するときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。



(送信出力“L1”時)



(送信出力“L2”時)



(送信出力“L3”時)



(送信出力“HI”時)

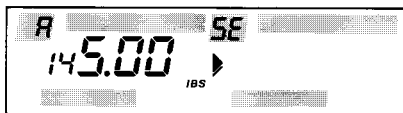
IBS機能

IBS(Intelligent Band Select)機能とは、クロスバンド・フルデュプレックス・デュアル受信運用時において、サブバンドに信号が入感したときに送信操作を行なう(PTTスイッチを押す)と、自動的にメインバンドとサブバンドが入れ換わり、サブバンドに出ている局と交信することができる機能です。

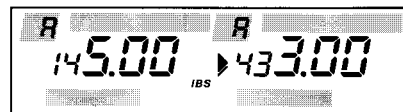
1. キーボードの **(GM)** キーと **(SET)** キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。
(セットモードの詳しい説明は、82ページをご覧ください。)



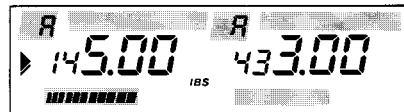
2. セットモード時にキーボードの **(ALT BAND)** キーを押すと、ディスプレイに“IBS”の表示が点灯して、IBS機能が“ON”になります。



3. 設定終了、再度 **(SET)** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、IBS機能が動作を開始します。



4. IBS機能が動作しているときにサブバンドに信号が入感すると、サブバンド表示部の“▶”表示が点滅します。



5. 相手局が受信状態に戻ってから3秒以内(ディスプレイの“▶”表示が点滅している間)にPTTスイッチを押すと、メインバンドとサブバンドが自動的に入れ換わって、従来サブバンドだったバンドでの送受信操作が行なえるようになります。



アドバイス

相手局が送信しているときにPTTスイッチを押しても、メインバンドとサブバンドを入れ換えることができます。

ただし、この場合は、バンドが入れ換わるだけで、送信状態にはなりません。



6. 上記1.~3.の操作を再度行なうと、ディスプレイの“IBS”表示が消灯して、IBS機能は解除されます。





V&V/U&Uデュアルレシーブ機能

V&V/U&Uデュアルレシーブ機能とは、430MHzにおいて、仲間の局と交信しながらレピーター局の信号も同時に受信する（この場合はU&U受信）ように、同じバンドの異なる2つの周波数を同時に受信する“同一バンド同時受信操作”のことで、

なお、144MHz帯に430MHzの周波数を設定すればU&U受信、430MHz帯に144MHzの周波数を設定すればV&V受信になります。（周波数の設定方法は、19ページの“DIRECT TUNING操作”で行なうことができます。）

また、U&U受信のときに144MHz帯に設定した（430MHz帯の）周波数に交信したい局が現れたような場合には、通常は144MHz帯に設定した（430MHz帯の）周波数では送信することができませんが、キーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、144MHz帯に設定されている（430MHz帯の）周波数と430MHz帯に設定されている周波数が入れ換わり、送信できるようになります（XFER機能）。

なお、再度  キーと  キーを続けて順に押すと、元の周波数関係に戻ります。



◎ V&V/U&Uデュアルレシーブ機能が動作しているときには、受信感度は若干悪くなります。

◎ V&V/U&Uデュアルレシーブ機能が動作しているときには、送信中はサブバンドの周波数を受信することはできません。

◎ V&V/U&Uデュアルレシーブ機能が動作しているときには、周波数関係により、内部ビートが発生して受信できない場合があります。

◎ V&V/U&Uデュアルレシーブ機能で同一周波数・同一信号を受信すると、VHF VOLツマミとUHF VOLツマミの位置関係により、受信音が小さくなる場合があります。



(V & V受信)

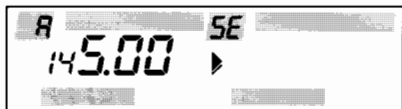


(U & U受信)

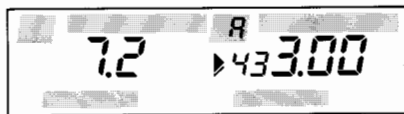
サブバンド表示の切り換え操作

この操作は、本機をモノバンド運用にしたときの、サブバンド表示部の表示内容を選択する操作です。

1. キーボードの **[EM]** キーと **[SET]** キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。(セットモードの詳しい説明は、82ページをご覧ください。)



2. セットモード時にキーボードの **[EM]** キーと **[ALT BAND]** キーを続けて順に押すと、現在設定されているサブバンド表示部の表示内容を、ディスプレイに表示します。
3. この状態で再度 **[ALT BAND]** キーを押すと、モノバンド運用時のサブバンド表示が **[ALT BAND]** キーを押すたびに右に示すように切り換わりますので、希望する表示内容に設定します。



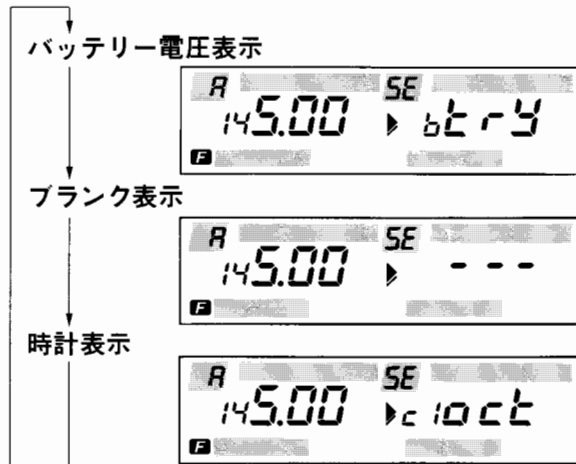
バッテリー電圧表示



ブランク表示



時計表示



4. 設定終了後、再度 **[SET]** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、サブバンド表示の切り換え操作は完了します。



本機のバッテリー電圧表示機能は、本体内部の電源電圧を検出するため、外部電源使用時には、本体内部の逆接保護用ダイオードや電源ケーブルでの電圧降下等の影響により、若干の誤差が生じます。

TX SAVE 機能

TX SAVE機能とは、送信時において、下記に示した状態のときには送信出力を下げ、電池の消耗を少なくする機能です。

★送信時に音声入力がないとき（無変調時）。

★レピーター運用時において、レピーター局の送信ディレイタイム中に送信操作を行なう場合と同じように、相手局の信号がフルスケールで入感しているときに送信操作を行なったとき。

なお、この機能は、下記の操作を行なうことにより、“ON/OFF”することができます。（工場出荷時には、TX SAVE機能は、“OFF”に設定してあります。）

1. キーボードの **MEM** キーと **SET** キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。（セットモードの詳細な説明は82ページをご覧ください。）



2. セットモード時にキーボードの **SAVE** キーを押すと、ディスプレイに“ts on”の表示が点灯して、TX SAVE 機能が“ON”になります。
3. この状態で再度 **SAVE** キーを押すと、ディスプレイの“ts on”表示が“ts OFF”に変わり、TX SAVE機能が“OFF”になります。

SAVE キーは押すたびに、TX SAVE機能が
“ON” → “OFF” → “ON” → “OFF” …



(TX SAVE
機能
“ON”)



(TX SAVE
機能
“OFF”)

の動作を繰り返します。

4. 設定終了後、再度 **SET** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、TX SAVE機能の“ON/OFF”操作は完了します。
5. TX SAVE機能が“ON”のときには、送信中にディスプレイに“SAVE”の表示が点滅します。



応用編

(各種の機能と操作)

FT-729の高性能を100%生かしたい!!
と思うあなたに!!

メモリー操作	34
コールチャンネル操作	38
スキャンコントロール	40
プライオリティ操作	47
レピーター運用	49
送信オフセット運用	52
トーンスケルチ・ベル運用	55
ページャー運用	59
DTMFモード	68
バッテリーセーブ運用	70
VOX運用	71
ビープ機能	73
ロック機能	74
時計機能	75
オートマチックパワー オフ (APO) 機能	80
セットモード	82

メモリー操作

本機には、運用周波数のほかにレピーター運用情報やトーンスケルチ運用情報なども同時に記憶(メモリー)することができる、40チャンネル(チャンネル番号1~38, L&U)のメモリーチャンネルがあります。

●メモリーセット

◎シンプルレックス・メモリー操作

メモリーチャンネルに送受信周波数が同じ周波数をメモリーする操作です。

サブバンド サブバンドに対してシンプルレックス・メモリー操作を行なうときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB^{OP}** キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. **VFOモード**において、メモリーしたい周波数を設定します。
2. キーボードの **MEM** キーを0.5秒以上押し続けるとディスプレイに点滅するメモリーチャンネル番号が現れます。
3. メモリーチャンネル番号が点滅している間(約5秒間)に**DIAL**ツマミまたはキーボードの **MH** / **MV** キーを操作してメモリーしたいメモリーチャンネルの番号が点滅するようにします。
4. 再び **MEM** キーを押せば、シンプルレックス・メモリー操作は完了します。

◎セミデュプレックス・メモリー操作

受信周波数と送信周波数が異なる2つの周波数を、1つのメモリーチャンネルにメモリーする操作です。



サブバンド サブバンドに対してはセミデュプレックス・メモリー操作を行なうことはできません。

1. まず初めに、前記で説明した“シンプルレックス・メモリー操作”の方法で、メモリーしたいメモリーチャンネルに受信周波数をメモリーします。
2. つぎに、送信周波数を設定します。
3. キーボードの **MEM** キーを0.5秒以上押し続けると、受信周波数をメモリーしたメモリーチャンネルの番号が点滅しますので、**PTT**スイッチを押しながら再度 **MEM** キーを押します。
4. 以上でセミデュプレックス・メモリー操作は完了です。



●メモリーチャンネルの呼び出し操作

メモリーチャンネルにメモリーされているデータを呼び出して運用する方法です。


なお、メモリーチャンネルにメモリーされているデータで運用することを、“メモリーモード”と呼びます。

メモリーチャンネルの呼び出し操作には、キーボードの数字キーでメモリーチャンネルを直接呼び出す“ダイレクト呼び出し操作”と、DIALツマミまたはキーボード  /  キーの操作によりメモリーチャンネルを順番に呼び出す“オーダー呼び出し操作”の2種類の方法があります。






サブバンドのメモリーチャンネルを呼び出すときには、まず初めにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

◎ダイレクト呼び出し操作

呼び出したいメモリーチャンネルの番号をキーボードの数字キーで設定し、続けて  キーを押せば、希望するメモリーチャンネルをダイレクトで呼び出すことができます。



メモリーチャンネル“25”を呼び出す場合、キーボードの数字キーを  -  -  の順で押します。



◎メモリーチャンネル“L”はチャンネル番号“39”，メモリーチャンネル“U”はチャンネル番号“40”で呼び出すことができます。

◎下記に示すメモリーチャンネルは、ダイレクト呼び出し操作では呼び出すことはできません。

- ★メモリーしていないメモリーチャンネル
- ★メモリーチャンネル“50”のように、本機には存在しないメモリーチャンネル

◎オーダー呼び出し操作

1. キーボードの **SKIP** / **MR** キーを押すとディスプレイにメモリーチャンネル番号が点灯し、メモリーチャンネルが呼び出されます。



2. **DIAL** ツマミまたはキーボードの **MHz** / **MHz** キーを操作すると、メモリーしてあるメモリーチャンネルのみが順番に呼び出されますので、希望するメモリーチャンネルを呼び出します。

アドバイス セミデュプレックス・メモリーをしたメモリーチャンネルを呼び出すと、ディスプレイに“—+”の表示が点灯します。

また、このときにキーボードの **CLOCK** / **REV** キーを押すと、送受信周波数を一時的に反転することができます。

(**リバース運用**：リバース運用時には、ディスプレイの“—+”表示は点滅します)。再度 **CLOCK** / **REV** キーを押せば、リバース運用は解除されます。



●メモリーモード時の付属機能

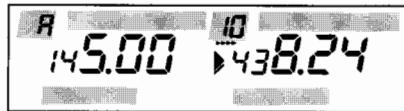
◎メモリーチューン機能

メモリーチューン機能とは、メモリーチャンネルにメモリーされている運用周波数(セミデュプレックス・メモリー操作をしたメモリーチャンネルは受信周波数)を、一時的に変えることができる機能です。



サブバンドのメモリーチャンネルにメモリーチューン機能を動作させるときには、まず初めにキーボードの **PM** キーと **SUB OP** / **SUN** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。


1. **メモリーモード**で運用中にキーボードの **SKIP** / **MR** キーを押すと、ディスプレイに“▶▶▶▶”の表示が点灯してメモリーチューン機能が動作します。



2. メモリーチューン機能が動作しているときに“**運用周波数の設定操作**”(17ページ参照)を行なうと、メモリーチャンネルにメモリーされている運用周波数(セミデュプレックス・メモリーをしたメモリーチャンネルは受信周波数)を一時的に変更することができます。





メモリーチューン時のステップ幅は、メモリーするときを使用したVFO(AまたはB)に設定してあったステップ幅になります。





3. メモリーチューン機能はキーボードの  キーを再度押すことにより、解除することができます。

アドバイス メモリーチューン機能と同様に、メモリーチャンネルにメモリーしたレピーター運用情報やトーンスケルチ運用情報なども、一時的に変更することができます。

◎メモリーチャンネルクリア操作


メモリーチャンネルクリア操作とは、メモリーチャンネルにメモリーした情報を、一時的に消去する機能です(ただし、メモリーチャンネル“1”を除く)。

サブバンド サブバンドのメモリーチャンネルをメモリーチャンネルクリアするときには、まず初めにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. **メモリーモード**時にキーボードの  キーを0.5秒以上押し続けると、ディスプレイのメモリーチャンネル番号が点滅を始めます。
2. メモリーチャンネルの番号が点滅をしている間(約5秒間)に、**DIAL**ツマミまたはキーボードの  /  キーを操作して、消去したいメモリーチャンネルを呼び出します。
3. この状態でキーボードの  キーを押すと、メモリーチャンネルは一時的に消去されます。
4. メモリーチャンネルクリア操作を行なったメモリーチャンネルは、上記1.~3.の操作を繰り返すことに

より、呼び戻すことができます。

●メモリーチャンネル運用の解除

キーボードの  キーを押すと**VFOモード**に切り換わります。

コールチャンネル操作

本機には、書き換え可能なコールチャンネルが144MHz帯と430MHz帯に1チャンネルずつあります。

●コールチャンネルの呼び出し操作

サブバンド サブバンドのコールチャンネルを呼び出すときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

キーボードの **DTMF CALL** キーを押すと、ワンタッチでコールチャンネルが呼び出せます。コールチャンネルを呼び出しているときにはディスプレイに、“**C**”の表示が点灯します(工場出荷時には、144MHz帯に144.00MHz、430MHz帯に430.00MHzの周波数が、コールチャンネルとしてプリセットしてあります)。



◎ コールチャンネルはメモリーチャンネルと同様に、運用周波数のほかにレピーター運用情報やトーンスケル運用情報なども同時に設定することができます。またこれらの情報はコールチャンネル呼び出し中に、一時的に変更することができます。

◎ コールチャンネル呼び出し時に“運用周波数の設定操作”(19ページ参照)を行なうと、コールチャンネルに移る前に使用していたVFO(AまたはB)に切り換わって**VFOモード**になり、コールチャンネルの周波数を一時的に変更することができます。

●コールチャンネルセット

◎シンプレックス・セット

コールチャンネルに送受信周波数が同じ周波数をセットするための操作です。

サブバンド サブバンドのコールチャンネルに周波数をセットするときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. **VFOモード**において、希望のコールチャンネル周波数を設定します。
2. キーボードの **MEM** キーを0.5秒以上押し続けるとディスプレイに点滅するメモリーチャンネル番号が現れますので、続けてキーボードの **DTMF CALL** キーを押します。
3. 以上でコールチャンネルに、希望する周波数が設定されます。

◎セミデュプレックス・セット

受信周波数と送信周波数が異なる2つの周波数を、1つのコールチャンネルにセットする操作です。

サブバンド サブバンドのコールチャンネルに対しては、セミデュプレックス・セットを行なうことはできません。

1. まず初めに、前記で説明した“シンプレックス・セット”の方法で、コールチャンネルに希望する受信周波数をセットします。
2. つぎに、送信周波数を設定します。
3. キーボードの **EM** キーを0.5秒以上押し続けると再びメモリーチャンネルの番号がディスプレイに点滅しますので、**PTT**スイッチを押しながら再度キーボードの **DTMF CALL** キーを押します。
4. 以上でコールチャンネルに、受信周波数と送信周波数が異なる2つの周波数が同時に設定されます。

アドバイス コールチャンネルにセミデュプレックス・セットを行なった場合には、コールチャンネル呼び出し時に、ディスプレイに“-+”の表示が点灯します。また、このときにキーボードの **CLOCK REV** キーを押せば、送受信周波数を一時的に反転することができます（**リバース運用**：リバース運用時には、ディスプレイの“-+”表示は点滅します）。再度 **CLOCK REV** キーを押せば、リバース運用は解除されます。



●ワンタッチリコール（コールチャンネル運用の解除）

キーボードの **DTMF CALL** スイッチを押すと、コールチャンネル運用に移る前に設定してあった状態（**VFOモード**または**メモリーモード**）に戻ります。

サブバンド サブバンドのコールチャンネルをワンタッチリコールするときには、まず初めにキーボードの **EM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください（サブバンドオペレーション）。

スキャンコントロール操作

本機はVFO周波数とメモリーチャンネルを、“5秒スキャン”と“ポーズスキャン”の2種類のスキャンストップモードでスキャンコントロール操作が行なえます。

スキャンコントロールとは、信号が入感する周波数またはメモリーチャンネルを自動的に捜し出す操作です。



スキャンコントロール操作を行なうときには、まえもって無信号時にスケルチが閉じ、信号が入感したときにスケルチが開くようにSQLツマミを調節しておきます。

2種類のスキャンストップモード

●5秒スキャン

スキャン中に信号が入感すると、スキャンが自動停止してその周波数またはチャンネルを約5秒間受信し、その後再びスキャンを開始します。ただし自動停止中でも、信号が無くなると約2秒後に再びスキャンを開始する方法です。

●ポーズスキャン

スキャン中に信号が入感すると、スキャンが自動停止してその周波数またはチャンネルを信号が無くなるまで継続して受信し、信号が無くなると約2秒後に再びスキャンを開始する方法です。

スキャンストップモードの選択方法は、右に示す“スキャンストップモードの選択操作”を参照し、スキャン操作を始める前に行ないます。

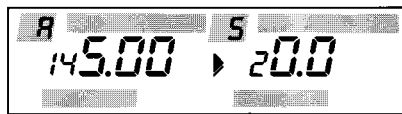
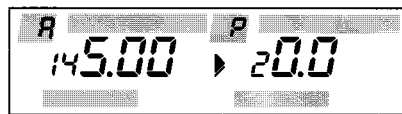
スキャンストップモードの選択操作



サブバンドのスキャンストップモードを選択するときには、まず初めにキーボードの **EM** キーと **SUB** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. キーボードの **EM** キーと **STEP 7** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定してあるスキャンストップモードが表示されます。
2. この状態で再度 **EM** キーを押すと、スキャンストップモードが **EM** キーを押すたびに、

“ポーズスキャン” ←→ “5秒スキャン”







と交互に切り換わりますので、希望するスキャンストップモードを選択します。

3. もう一度 **STEP 7** キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、スキャンストップモードの選択操作は完了します。

●VFO周波数スキャン

VFOモードでスキャンコントロールを行なう操作で、信号が入感する周波数を自動的に捜し出すことができます。

サブバンド サブバンドでVFO周波数スキャン操作を行なうときには、まず初めにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。


1. VFOモードで運用中にキーボードの  /  キーを0.5秒以上押し続けると、自動的に運用周波数がそれぞれの方向へ変化し、順番にそれらの周波数をスキャン(連続受信)して行きます。
2. スキャン中に信号が入感するとスキャンが一時停止し、まもなく設定したスキャンストップモードの条件を満たすと、再びスキャンを開始します。
3. VFO周波数スキャン操作は、次の方法で解除できます。


★PTTスイッチをワンタッチで押す(メインバンドのスキャン操作にのみ有効：この場合はスキャン操作が解除されるだけで、送信状態にはなりません)。

★キーボードの  /  キーをワンタッチで押す。

★DIALツマミを1クリックまわす。

★キーボードの  キーを押す。

★キーボードの  キーを押す(メモリーモードに移行します)。

★キーボードの  キーを押す(コールチャンネルに移行します)。

●メモリーチャンネルスキャン

◎メモリーチャンネルスキャンコントロール

メモリーモードでスキャンコントロールを行なう操作で、信号が入感するメモリーチャンネルを自動的に探し出すことができます。



サブバンドでメモリーチャンネルスキャンコントロール操作を行なうときには、まず最初にキーボードの キーと キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. **メモリーモード**で運用中にキーボードの / キーを0.5秒以上押し続けると、メモリーしてあるメモリーチャンネルだけを順にスキャン(連続受信)して行きます。



メモリーチューン機能が動作しているときにスキャン操作を行なうと、VFO周波数スキャン操作と同じように、現在運用している周波数を中心に、それぞれの方向へスキャンして行きます。

2. スキャン中に信号が入感するとスキャンが一時停止し、まえもって設定したスキャンストップモードの条件を満たすと、再びスキャンを開始します。

3. メモリーチャンネルスキャンコントロール操作は、次の方法で解除できます。

★PTT スイッチをワンタッチで押す(メインバンドのスキャン操作にのみ有効：この場合はスキャン操作が解除されるだけで、送信状態にはなりません)。

★キーボードの / キーをワンタッチで押す。

★DIALツマミを1クリックまわす。

★キーボードの キーを押す。

★キーボードの キーを押す(メモリーモードに移る前に使用していたVFO(AまたはB)に移行します)。

★キーボードの キーを押す(コールチャンネルに移行します)。

◎メモリーチャンネルスキップ

指定したメモリーチャンネルはスキャン(受信)せずに、希望するメモリーチャンネルだけを順にスキャン(連続受信)する方法です。

メモリーチャンネルスキップ操作を行なうまえに、下記の手順でスキップさせたいメモリーチャンネルを設定します。



サブバンドのメモリーチャンネルに対して、メモリーチャンネルスキップ操作を行なうときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB** キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. まず初めに、スキップさせたい(受信したくない)メモリーチャンネルを呼び出します。
2. ここで、キーボードの **MEM** キーと **MR** キーを続けて順に押し、ディスプレイに“◀”の表示が点灯してスキャンスキップセット操作が完了します。
3. 上記1.,2.の操作を繰り返し、スキップさせたいすべてのメモリーチャンネルにスキップセットを行ないます。




4. この状態でスキャン操作を行なう(キーボードの **MH** / **MH** キーを0.5秒以上押し続ける)と、スキップセットを行なったメモリーチャンネルはスキップして(受信せずに)、スキャンが始まりません。
5. スキップセットを行なったメモリーチャンネルは、上記1.,2.の操作を繰り返すことにより、スキップは解除されます(ディスプレイの“◀”表示が消灯します)。

● プログラマブルメモリスキャン (PMS) 操作

プログラマブルメモリスキャン (PMS) 操作とは、メモリーチャンネル“L”とメモリーチャンネル“U”にメモリーした受信周波数の間を、“スキャンコントロール”する操作で、特定の周波数範囲（たとえばJARLが定めたレピーター用出力周波数帯）だけをスキャン操作することができます。

サブバンド サブバンドでプログラマブルメモリスキャン (PMS) 操作を行なうときには、まず初めにキーボードの **MR** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください（サブバンドオペレーション）。

1. まず初めに、メモリーチャンネル“L”にスキャンの下限周波数、メモリーチャンネル“U”にスキャンの上限周波数をメモリーします。

 ◎ 上限周波数、下限周波数の設定は、必ずメモリーチャンネル“L”にスキャンの下限周波数、メモリーチャンネル“U”にスキャンの上限周波数をメモリーしてください。

逆に設定した場合には、PMSは動作しません。

また、上限周波数と下限周波数の間は、必ず100kHz以上あけるようにしてください。


- ◎ メモリーチャンネル“L”またはメモリーチャンネル“U”のどちらかに、メモリーチャンネルスキップ（前ページ参照）がセットしてあると、PMSは動作しません。

2. メモリーチャンネルの“L”または“U”チャンネルを呼び出し、キーボードの **SKIP MR** キーを押してメモリーチューン機能を動作させます。



3. この状態でキーボードの **MHz** / **MHz** キーを0.5秒以上押し続けると、上記1.の項で設定した上限周波数と下限周波数の間を連続的にスキャンします。



 PMS時のステップ幅は、上記2.項で呼び出したメモリーチャンネル“L”またはメモリーチャンネル“U”にメモリーされているステップ幅で周波数が連続的に変化します。



4. スキャン中に信号が入感するとスキャンが一時停止し、まえもって設定したスキャンストップモードの条件を満たすと、再びスキャンを始めます。

5. 一時停止しているPMSは、次の方法により完全に停止します。


★PTTスイッチをワンタッチで押す(メインバンドのPMSにのみ有効；この場合はスキャンが完全停止するだけで、送信状態にはなりません)。


★DIALツマミを1クリックまわす。




プログラマブルメモリスキャン(PMS)が動作中は、DIALツマミとキーボードの  /  キーの周波数可変範囲およびDIRECT TUNING操作時のキー入力範囲も、上記1.の項で設定した上限周波数と下限周波数の間だけになります。





6. プログラマブルメモリスキャン(PMS)は、次の方法により解除できます。

★キーボードの  キーを押す(PMSを始める前に使用していたVFO(AまたはB)に移行します)。

★キーボードの  キーを押す(メモリーモードに移行します)。

★キーボードの  キーを押す(コールチャンネルに移行します)。

ダイレクトPMS操作



すでにメモリーチャンネル“L”とメモリーチャンネル“U”に周波数が正しく設定してあれば、VFOモードまたはコールチャンネルで運用しているときにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、メモリーチャンネル“L”が呼び出されるとともにメモリーチューン機能も同時に動作しますので、キーボードの  /  キーを操作するだけでPMSを動作させることができます。





ダイレクトPMS時のステップ幅は、メモリーチャンネル“L”にメモリーされているステップ幅で周波数が連続的に変化します。

●オルタネートスキャン

オルタネートスキャンとは、メインバンドとサブバンドにメモリーされているメモリーチャンネルを交互にスキャンして行く操作です。

1. キーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“ALT”の表示が点灯します。



2. この状態でキーボードの  /  キーを0.5秒以上押し続けると、メインバンドとサブバンドにメモリーしてあるメモリーチャンネルを交互にスキャンして行きます。



メモリーチャンネルスキップ(43ページ参照)を行なったメモリーチャンネルは、受信(スキャン)せずにスキップします。




3. スキャン中に信号が入感するとスキャンが一時停止し、まえもって設定したスキップモードの条件を満たすと、再びスキャンを開始します。
4. 一時停止しているオルタネートスキャンは、次の方法で解除できます。

★PTTスイッチをワンタッチで押す(この場合はオルタネートスキャンが完全停止するだけで、送信状態にはなりません)。

★DIALツマミを1クリックまわす。



オルタネートスキャン中は、DIALツマミでもメモリーチャンネルを交互に呼び出すことができます。

5. オルタネートスキャンは、次の方法により解除できます。
 - ★キーボードの  キーを押す(オルタネートスキャンを始める前に使用していたVFO(AまたはB)に移行します)。
 - ★キーボードの  キーを押す(メモリーモードに移行します)。
 - ★キーボードの  キーを押す(コールチャンネルに移行します)。

●トーンスケルチスキャン

本機は、トーンスケルチ運用(55ページ参照)中にスキャン操作を行なうと、自局がセットしているトーン周波数と同じ周波数のトーン信号を伴った信号を受信したときにのみスキャンが一時停止する、トーンスケルチスキャン操作になります。



本機のスキャン操作は、オルタネートスキャンを除き、サブバンドでメモリーチャンネルスキャンコントロールを行ないながらメインバンドでVFO周波数スキャンを行なうように、メインバンドとサブバンドを個別に独立して、異なるスキャンコントロール操作を行なうことができます。

プライオリティ機能

プライオリティ機能とは、VFOモードまたはメモリーモードで受信中に、5秒間に1回メモリーチャンネルを優先的に約200mS受信する“優先チャンネル監視機能”です。



プライオリティ機能を動作させるときには、まえてもって無信号時にスケルチが閉じ、信号が入感したときにスケルチが開くようにSQLツマミを調節しておきます。

●VFOモード時のプライオリティ操作

VFOモード時にプライオリティ機能を動作させて、VFOで設定した周波数を受信しながら指定したメモリーチャンネルを約5秒間に1回、優先的に受信する操作です。



サブバンドでプライオリティ操作を行なうときには、まず初めにキーボードの **PM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. プライオリティしたいメモリーチャンネル(優先チャンネル)を呼び出します。
2. キーボードの **PRI VFO** キーを押して、一度VFOモードに戻します。

3. キーボードの **PM** キーと **PRI VFO** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“P”の表示が点灯してプライオリティ機能が動作を始めます。



プライオリティ機能が動作中でも、送信はもちろんのことVFOの周波数を変えることもできます。ただし、メインバンドでプライオリティ操作を行なっているときには、送信中に優先チャンネルを受信することはできません。

4. スキャンコントロール操作と同じように、優先チャンネルに信号が入感するとプライオリティ機能が一時停止して優先チャンネルを受信し、スキャンストップモードの条件(40ページ参照)を満たすと、再びプライオリティ機能が動作を始めます。なお、プライオリティ機能が一時停止しているときには、周波数表示部のMHz桁の小数点(デシマルポイント)が点滅します。
5. メインバンドの優先チャンネルを受信しているときには、送信するとプライオリティ機能は自動的に解除されて、メモリーチャンネル(優先チャンネル)での送受信操作に切り換わります。

●メモリーモード時のプライオリティ操作

メモリーモード時にプライオリティ機能を動作させて、任意のメモリーチャンネルを受信しながらメモリーチャンネル“1”にメモリーした周波数を約5秒間に1回、優先的に受信する操作です。

サブバンド サブバンドでプライオリティ操作を行なうときには、まず初めにキーボードの **EM** キーと **SUB^{OP}** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. メモリーチャンネル“1”にプライオリティ受信したい周波数をメモリーします。
2. キーボードの **EM** キーと **VFO** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“P”の表示が点灯してプライオリティ機能が動作を始めます。



アドバイス プライオリティ機能が動作中でも、送信はもちろんのことメモリーチャンネルを変えることもできます。ただし、メインバンドでプライオリティ操作を行なっているときには、送信中に優先チャンネル(メモリーチャンネル“1”)を受信することはできません。

3. スキャンコントロール操作と同じように、優先チャンネルに信号が入感するとプライオリティ機能が一時停止して優先チャンネル(メモリーチャンネル“1”)を受信し、スキャンストップモードの条件(40ページ参照)を満たすと、再びプライオリティ機能が動作を始めます。なお、プライオリティ機能が一時停止しているときには、周波数表示部のMHz桁の小数点(デシマルポイント)が点滅します。
4. メインバンドの優先チャンネル(メモリーチャンネル“1”)を受信しているときには、送信するとプライオリティ機能は自動的に解除されて、メモリーチャンネル“1”(優先チャンネル)での送受信操作に切り換わります。

●プライオリティ操作の解除

プライオリティ操作は、次の方法により解除できます。

サブバンド サブバンドのプライオリティ操作を解除するときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

- ★キーボードの **PRI** (**VFO**) キーを押す(VFOモードに移行します)。
- ★キーボードの **SKIP** (**MR**) キーを押す(メモリーモードに移行します)。
- ★キーボードの **DTMF** (**CALL**) キーを押す(コールチャンネルに移行します)。

注意 本機のプライオリティ操作は、サブバンドでメモリーモード時のプライオリティ操作を行ないながらメインバンドで**VFOモード**時のプライオリティ操作を行なうように、メインバンドとサブバンドを個別に独立して、異なるプライオリティ操作を行なうことができます。

レピーター運用

本機の430MHz帯は**ARS(Automatic Repeater Shift)機能**により、受信周波数をレピーター局の出力(送信)周波数にあわせるだけで、簡単にレピーター運用が行なえます。

サブバンド 本機は、サブバンドでは送信することができないため、430MHz帯がサブバンドに設定してあるときにはレピーター運用は行なえません。ただし、サブバンドでも、受信周波数をレピーター用出力周波数帯の中に設定すれば、ARS機能は自動的に動作します。

なお、サブバンドの受信周波数をレピーター局の出力(送信)周波数にあわせるときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

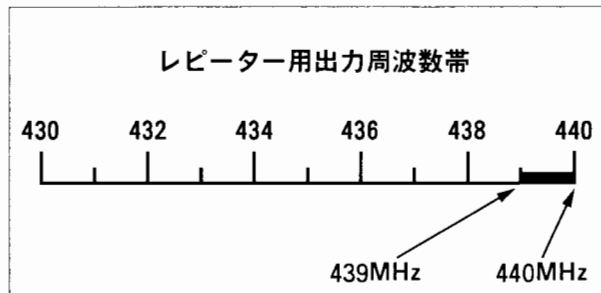
1. 受信周波数をレピーター局の出力(送信)周波数にあわせます。受信周波数をレピーター用出力周波数帯の中に設定すると、ディスプレイに“T”と“-”の表示が点灯してレピーター運用が行なえます。



2. この状態で送信すると、88.5Hzのトーン信号を発しながら受信信号より5MHz低い周波数で送信状態になり、レピーター局をアクセスすることができます。
3. レピーター局を經由して受信しているときに、キーボードの **CLOCK** キーを押すと、ディスプレイの“-”表示が点滅して送受信周波数が反転し、相手局がレピーター局に向けて送信している信号を受信することができます。十分な強さで受信できるような場合には、レピーター局を經由せずに直接交信(シンプレックス)することができます。もう一度 **CLOCK** キーを押すと、元の周波数関係に戻ります。
4. 受信周波数をレピーター用出力周波数帯の外に設定すると、ディスプレイの“T”と“-”の表示が消灯して、通常のシンプレックス運用に変わります。

アドバイス

- ◎ レピーター運用中にメモリーセット操作(34ページ参照)を行なうと、運用周波数とともにレピーター運用情報もメモリーすることができます。
- ◎ レピーター運用情報は、コールチャンネルにも設定することができます。
- ◎ 将来シフト方向の異なるレピーター局やレピーター用出力周波数帯以外の周波数にレピーター局が開局したときには、52ページの“**送信オフセット運用**”によりレピーター局をアクセスしてください。
- ◎ 本機のARS機能は、簡単なキー操作で“OFF”(受信周波数がレピーター用出力周波数帯の中にはいつでもレピーター運用状態にならない)にすることができます(次ページ参照)。



ARS機能の“ON/OFF”操作

本機のARS機能は、受信周波数がレピーター出力周波数帯の中に入っても、レピーター動作にならないように、“OFF”にすることができます。

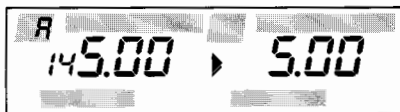
1. キーボードの **MEM** キーと **SET** キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。(セットモードの詳しい説明は、82ページをご覧ください。)



2. セットモード時にキーボードの **RPT** キーを押すと、ディスプレイに現在設定されているARS機能の動作状態(“ON”または“OFF”)を表示します。
3. この状態でキーボードの **MEM** キーを押すと、ARS機能の動作状態が **MEM** キーを押すたびに、



(“R”の表示が点灯)



(“R”の表示が消灯)

“ON” → “OFF” → “ON” ……

- の動作を繰り返しますので、希望する動作状態になるように設定します。
4. 設定終了後、再度 **RPT** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、ARS機能の“ON/OFF”操作は完了します。

送信オフセット運用

送信オフセット運用とは、将来シフト方向の異なるレピーター局やレピーター用出力周波数帯以外の周波数にレピーター局が開局したとき、あるいは144MHz帯で送受信周波数の異なる交信を行なうときのように、受信周波数に対して送信周波数をあらかじめ決めておいた周波数（シフト幅）だけ希望する方向（シフト方向）にシフトさせて運用する方法です。

なお、送信オフセット運用を行なうためには、54ページの“シフト幅の変更操作”により、あらかじめシフト幅を希望する値に設定しておきます。

本機は、サブバンドでは送信することができないため、サブバンドでは送信オフセット運用は行なえませんが、運用状態（シフト方向）の設定は行なうことができます。

アドバイス なお、サブバンドに送信オフセット運用のシフト方向を設定するときには、まず初めにキーボードの **MEM** キーと **SUB^{OP}** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください（サブバンドオペレーション）。

1. まず初めに、受信周波数を設定します。
2. キーボードの **MEM** キーをワンタッチで押すと、ディスプレイに“**F**”の表示が点灯しますので、この表示が点灯している間（約5秒間）に **RPT₆** キーを押すと、シフト方向が **RPT₆** キーを押すたびに

マイナスシフト

★ディスプレイに“-”の表示が点灯し、受信周波数に対して送信周波数がシフト幅の値だけ低くなります。



プラスシフト

★ディスプレイの“-”表示が“+”表示に変わり、受信周波数に対して送信周波数がシフト幅の値だけ高くなります。




シンプレックス


★ディスプレイの“+”表示が消灯し、受信周波数と送信周波数が同一になります。



の動作を繰り返しますので、希望のシフト方向に設定します。

3. この状態で送信すると、上記2.の項で設定した周波数関係が成り立つ周波数で送信状態になり、送受信周波数が異なるシフト運用が行なえます。

また、このときにキーボードの  キーを押せば、送受信周波数を一時的に反転することができます(リバース運用：リバース運用時には、ディスプレイの“-”または“+”表示が点滅します)。

再度  キーを押せば、リバース運用は解除されます。

アドバイス

◎ 送信オフセット運用中にメモリーセッ
ト操作(34ページ参照)を行なうと、
運用周波数とともに送信オフセット運用情報も同時
にメモリーすることができます。

◎ 送信オフセット運用情報は、コールチャンネルにも設定することができます。

◎ 送信オフセット運用でレピーター局をアクセスするためには、シフト幅を“5MHz”，シフト方向を“マイナスシフト”に設定するとともに、送信時に88.5Hzのトーン信号が出力されるように、本機を“トーンエンコーダー運用”の状態(55ページ参照)に設定します。



本機は、サブバンドに“プラスシフト”の運用状態を設定してメインバンドで“マイナスシフト”の運用を行なうように、メインバンドとサブバンドを個別に独立して、異なる運用状態で送信オフセット運用を行なうことができます。

シフト幅の変更操作

工場出荷時、送信オフセット機能のシフト幅（受信周波数と送信周波数の周波数差）は、右下に示す表のように設定してありますが、下記の操作を行なうことにより、任意の値（最小ステップ：50kHz）に変更することができます。

サブバンド

サブバンドに設定してあるシフト幅の変更を行なうときには、まず初めにキーボードの **GM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押し、サブバンド周波数表示の左側に点滅する “▶” を表示させてから行なってください（サブバンドオペレーション）。

1. キーボードの **GM** キーと **SET** キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。（セットモードの詳細な説明は、82ページをご覧ください。）



2. セットモード時にキーボードの **RPT** キーを押すと、ディスプレイに現在設定されているシフト幅を表示しますので、DIALツマミまたはキーボードの **MH** / **MV** キーを操作して、希望のシフト幅を設定します。



3. 設定終了後、再度 **RPT** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、シフト幅の変更操作は完了します。

	144MHz帯	430MHz帯
VFO A	0KHz	5MHz
VFO B	0KHz	5MHz

トーンスケルチ・ベル運用

●トーンスケルチ運用

トーンスケルチ運用とは、特定局を対象に“待ち受け/呼び出し操作”が行なえる運用方法のことです。



なお、トーンスケルチ運用を行なうためには、58ページの“トーン周波数の選択操作”により、あらかじめ自局と相手局とのトーン周波数を同じ周波数に設定しておきます。






自局と相手局のトーン周波数が同じでないと、トーンスケルチ運用を行なうことはできません。



本機は、サブバンドでは送信することができないため、サブバンドではトーンスケルチ運用の“呼び出し操作”を行なうことはできませんが、“待ち受け操作”だけは行なうことができます。

なお、サブバンドでトーンスケルチ運用の“待ち受け操作”を行なうときには、まず初めにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

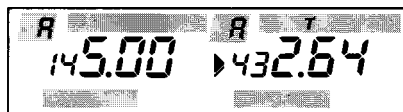
1. キーボードの  キーをワンタッチで押すと、ディスプレイに“F”の表示が点灯します。
2. ディスプレイに“F”の表示が点灯している間(約5秒間)に  キーを押すと、運用状態が  キーを押すたびに次ページに示すように変化しますので、運用状態をトーンスケルチ運用に設定して交信を行ないます。



- ◎ トーンスケルチ運用中にメモリーセット操作(34ページ参照)を行なうと、運用周波数とともにトーンスケルチ運用情報も、同時にメモリーすることができます。
- ◎ トーンスケルチ運用情報はコールチャンネルにも設定することができます。
- ◎ トーンスケルチ運用情報は、メインバンドとサブバンドに、個別に独立して設定することができます。

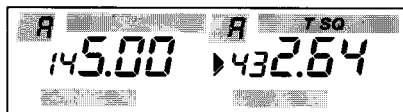
トーンエンコーダー運用

★ディスプレイに“T”の表示が点灯し、送信時に音声信号とともに“トーン周波数の選択操作”で設定した周波数のトーン信号を連続して送信します。なお、この運用方法は前述の“送信オフセット運用”と併用して、レピーター局をアクセスするとき 사용합니다。



トーンスケルチ運用

★ディスプレイに“T”と“SQ”の表示が点灯し、送信時にはトーンエンコーダー運用時と同様に音声信号とともにトーン信号を連続して送信し、相手局のトーンスケルチ回路のスケルチを開けて相手局を呼び出すことができます（呼び出し操作）。



また、受信時には、設定したトーン周波数と同じ周波数のトーン信号を伴った信号を受信したときのみトーンスケルチ回路のスケルチが開き、相手局の信号を受信することができます（待ち受け操作）。

なお、トーン周波数の異なる信号やトーン信号を含まない信号では、トーンスケルチ回路が開かず受信することができませんが、**BUSY/TX**インジケータが緑色に点灯して信号が入感していることを知らせます。また、このときに**SQL OFF**スイッチを押せば、その信号を押している間だけ受信することができます。

トーンエンコーダー運用・トーンスケルチ運用解除

サブバンドでは送信することができないため、トーンエンコーダー運用は行なえません。また、トーンスケルチ運用の“呼び出し操作”も行なうことはできませんが、“待ち受け操作”だけは行なうことができます。

●ベル運用



ベル運用とは、特定局からの呼び出しを、呼び出し音とディスプレイの表示で知らせる運用方法のことです。


なお、ベル運用を行なうためには、58ページの“トーン周波数の選択操作”により、あらかじめ自局と相手局とのトーン周波数を同じ周波数に設定しておきます。



自局と相手局のトーン周波数が同じでないと、ベル運用は行なうことはできません。



サブバンドでベル運用を行なうときには、まず初めにキーボードの  キーと  キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください（サブバンドオペレーション）。

キーボードの  キーを押すたびに、本機の動作状態が次ページに示すように変化しますので、運用状態をベル運用に設定します。

ページャー動作

★ディスプレイに“PAGE”の表示が点灯し、ページャー動作になります。なお、この動作は、ベル運用とは異なる動作です。詳しくは59ページの、“ページャー運用”をご覧ください。



トリガーページャー動作

★ディスプレイに“PAGE”と“☹”の表示が点灯し、トリガーページャー動作になります。なお、この動作も、ベル運用とは異なる動作です。詳しくは59ページの“ページャー運用”をご覧ください。



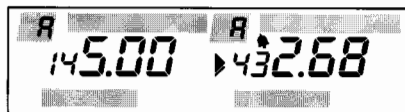
コードスケルチ動作

★ディスプレイに“CODE”の表示が点灯し、コードスケルチ動作になります。なお、この動作も、ベル運用とは異なる動作です。詳しくは59ページの、“ページャー運用”をご覧ください。



ベル運用

★ディスプレイに“●”の表示が点灯し、ベル運用になります。ベル運用時には、設定したトーン周波数と同じ周波数のトーン信号を伴った信号を受信したときにのみ“●”の表示が点灯から点滅に変わり、呼び出し音が鳴って呼び出しがあったことを知らせます。なお、ディスプレイの表示は応答するまで点滅し続けますので、無線機から離れていた場合でも、呼び出しがあったことを知ることができます。



ページャー運用・ベル運用“解除”

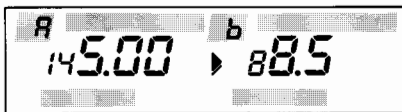
なお、トーン周波数の異なる信号やトーン信号を含まない信号ではトーンスケルチ回路は開かず、受信することはできませんが、**BUSY/TX**インジケータが緑色に点灯して信号が入感していることを知らせます。また、このときに、**SQL OFF**スイッチを押せば、その信号を聞くことができます。

トーン周波数の選択操作



サブバンドに設定してあるトーン周波数の選択を行なうときには、まず初めにキーボードの キーと キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

1. キーボードの キーと キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定してあるトーン周波数を表示しますので、DIALツマミまたはキーボードの / キーにより、希望するトーン周波数を呼び出します。



2. 呼び出し終了後、再度 キーを押すと、ディスプレイのトーン周波数表示が運用周波数表示に戻り、トーン周波数の選択操作は完了します。



トーン周波数は下表に示すように、144MHz帯の2つのVFO (A/B)と430MHz帯の2つのVFO (A/B)に、それぞれ異なるトーン周波数を、個別に独立して設定することができま

	VFO A	VFO B
144MHz帯	77.0Hz	241.8Hz
430MHz帯	88.5Hz	179.9Hz

67.0	88.5	114.8	151.4	203.5
69.3	91.5	118.8	156.7	210.7
71.9	94.8	123.0	162.2	218.1
74.4	97.4	127.3	167.9	225.7
77.0	100.0	131.8	173.8	233.6
79.7	103.5	136.5	179.9	241.8
82.5	107.2	141.3	186.2	250.3
85.4	110.9	146.2	192.8	—

ページャー運用

ページャー運用とは、トーンスケルチ運用と同じように、ある特定の局や特定したグループだけを対象に“待ち受け/呼び出し操作”が行なえる運用方法です。ただし、ページャー運用はトーンスケルチ運用に比べ、“ページャー呼び出し”や“コードスケルチ呼び出し”等の機能が追加されていますので、より高度な“待ち受け/呼び出し操作”が行なえるようになります。



VOX回路(71ページ参照)が動作しているときには、ページャー運用を行なうことはできません。

● ページャーコードの設定

ページャーコードとは、ページャー運用を行なうために使用する制御コードのことで、“000”から“999”までの3桁の数字で表わされるDTMF信号の組み合わせにより構成されており、トーンスケルチ運用時のトーン信号と同じ役目を持っています。

なお、このページャーコードには、個別コードとグループコードの2種類があり、次に示すような運用上の違いがあります。

個別コード

個別コードとは、各局がそれぞれ個別に持っている、その局専用のページャーコードのことで、このページャー(個別)コードを使用して呼び出し操作を行なうと、その局だけを指定して呼び出すことができます(個別呼び出し)。

グループコード

グループコードとは、いくつかの局が集まって1つのグループとして運用しているときに、そのグループ全員に共通したページャーコードのことで、このページャー(グループ)コードを使用して呼び出し操作を行なうと、そのグループに属している全ての局を一斉に呼び出すことができます(グループ呼び出し)。

また、このページャーコードには、144MHz帯と430MHz帯とに共通の、8チャンネルの専用メモリーチャンネル“コードメモリー”があり、そのコードメモリーにあらかじめ取り決めたページャーコードをメモリーしておくことにより、能率良くページャー運用を行なうことができます。なお、コードメモリーの各チャンネルは、次のようなルールがありますので、このルールに従って各コードメモリーにそれぞれのページャーコードを設定します。

コードメモリー“0”	: 相手局の個別コード用	(受信専用: 内容書き換え不可)
コードメモリー“1”	: 自局の個別コード用	(着呼禁止機能“動作/解除” 切り換え不可: 常時着呼禁止機能“解除”)
コードメモリー“2”	: 自局が属しているグループのグループコード用	(着呼禁止機能“動作”)
コードメモリー“3”	: その他のグループのグループコード用	(着呼禁止機能“動作”)
コードメモリー“4”	: その他のグループのグループコード用	(着呼禁止機能“動作”)
コードメモリー“5”	: その他のグループのグループコード用	(着呼禁止機能“動作”)
コードメモリー“6”	: その他のグループのグループコード用	(着呼禁止機能“動作”)
コードメモリー“7”	: 相手局のページャーコード確認用	(着呼禁止機能“動作/解除” 切り換え可能: ただし、キー操作による 書き込み不可)

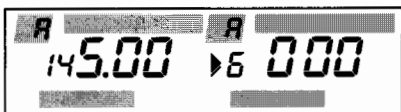
* 自局用の個別コードとグループコードが設定してあるコードメモリー以外のコードメモリー“3”～“6”には、そのページャーコードを受信しても呼び出されないよう着呼禁止機能(66ページ参照)を動作させておきます。


また、コードメモリー“7”は別名『**ワイルドメモリー**』と言い、受信したページャーコードの最後の3桁を自動的に記憶する、専用メモリーです。

1. キーボードの **MEM** キーと **CODE PAGE** キーを続けて順に押すと、下に示すような表示がディスプレイに現れ、ページャーコードの設定モードになります。

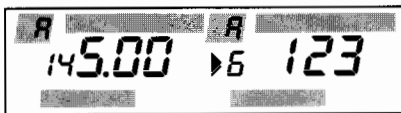


2. この状態で **DIAL** ツマミまたはキーボードの **MMS** / **DOWN** キーを操作すると、コードメモリーのチャンネル番号が変化しますので、設定しようとするコードメモリーのチャンネル番号が点滅するようにします。



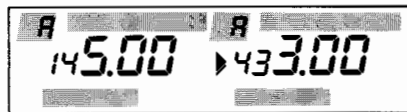
 コードメモリー“0”と“7”には、ページャーコードの設定はできません。

3. ここで、キーボードの数字キーで希望するページャーコード（3桁）を入力します。



4. 上記2.と3.の操作を繰り返し、他のコードメモリーにもページャーコードを設定して行きます。

5. すべてのコードメモリーにページャーコードが設定できたら、もう一度 **CODE PAGE** キーを押します。ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、ページャーコードの設定操作は完了します。



●待ち受け操作

不要な通信を一切排除し、ある特定の局や、特定したグループからの呼び出しを受けたときのみ、相手局からの信号を受信することができる操作です。

なお、待ち受け操作には、特定局からの呼び出しを電子音で知ることのできる“ページャー動作”と、特定局からの呼び出しを受けたときにそのまま交信状態に移ることのできる“コードスケルチ動作”の2種類の待ち受け方法がありますので、下記の操作を参考に、どちらか希望する待ち受け方法に設定します。

サブバンド

サブバンドでページャー運用を行なうときには、まず初めにキーボードの **IBM** キーと **SUB OP** キーを続けて順に押して、サブバンド周波数表示の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

また、同時に**IBS機能**を動作させておけば、サブバンドで呼び出しを受けたときでも、簡単に応答することができます(28ページ参照)。

キーボードの **CODE PAGE** キーを押すごとに、待ち受け方法が右に示すように切り換わって行きますので、希望する待ち受け方法に設定します。

アドバイス

ページャー動作時またはトリガーページャー動作時に、呼び出しを受けたときに鳴る呼び出し音は、83ページの“呼び出し音の回数変更操作”を行うことにより、呼び出し音の鳴る回数を変更することができます。また、96ページの“呼び出し音の動作変更操作”を行なうことにより、呼び出しを受けてから応答するまで、約1分おきに呼び出し音が鳴るようにすることもできます。

▶ ページャー動作

★ディスプレイに“PAGE”の表示が点灯し、あらかじめコードメモリーにメモリーしてあるページャーコードのいずれかと同じ組み合わせのページャーコードの信号を受信したときのみ“PAGE”表示が点灯から点滅に変わって呼び出し音が鳴り、ディスプレイに



◎ 個別呼び出しで呼び出しを受けたときには、呼び出してきた局の個別コード

◎ グループ呼び出しで呼び出しを受けたときには、そのときに使用したグループコード

を表示して、どの局から呼ばれたのかを知らせます。ディスプレイに表示されたページャーコードは、応答するまで(PTTスイッチを押すまで)点滅し続けますので、無線機から離れていた場合でも、呼び出しがあったことを知ることができます。

なお、呼び出されたときに送信操作を行なうと、相手局の個別コードと自局の個別コードを送信の初めに自動送出し、応答することができます。

また、応答後相手局と交信する場合には、ページャー運用を解除してから行なってください。

▶ ページャー運用・ベル運用“解除”◀

→ トリガーページャー動作 (FT-729同士の交信のときに使います)

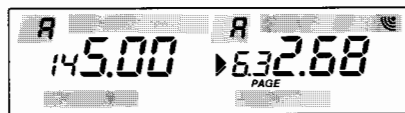
★ディスプレイに“PAGE”と“☺”の表示が点灯し、あらかじめコードメモリーにメモリーしてあるページャーコードのいずれかと同じ組み合わせのページャーコードの信号を受信したときにのみ“PAGE”と“☺”の表示が点灯から点滅に変わって呼び出し音が鳴り、ディスプレイに

- ◎ 個別呼び出しで呼び出しを受けたときには、呼び出してきた局の個別コード
- ◎ グループ呼び出しで呼び出しを受けたときには、そのときに使用したグループコード

を表示して、どの局から呼ばれたのかを知らせます。ディスプレイに表示されたページャーコードは、応答するまで (PTTスイッチを押すまで) 点滅し続けますので、無線機から離れていた場合でも、呼び出しがあったことを知ることができます。

なお、呼び出されたときに直ちに (3秒以内) 送信操作を行なうと、相手局の個別 (またはグループ) コードと自局の個別コードを送信の初めに自動送出して、そのまま相手局と交信することができます。

また、一度相手局と交信状態になると、ページャーコードを送出しなくなりますので、静かな交信を行なうことができます。



→ コードスケルチ動作

★ディスプレイ内に“CODE”の表示が点灯し、現在ディスプレイに表示してあるコードメモリーにメモリーしてあるページャーコードと同じ組み合わせのページャーコードを受信した場合にのみ、相手局の信号を受信することができます。

なお、呼び出されたときに送信操作を行なうと、本機もディスプレイに表示してあるコードメモリーにメモリーしてあるページャーコードを送信の初めに自動送出し、応答することができます。



→ ベル運用

★ディスプレイに“●”の表示が点灯し、ベル運用になります。

なお、この動作は、ページャー運用とは異なる動作です。詳しくは56ページの、“ベル運用”をご覧ください。



●呼び出し操作

ページャー運用で待ち受けしている局を呼び出す操作です。

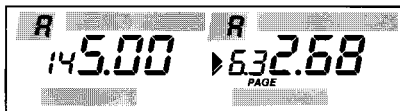
サブバンド 本機は、サブバンドでは送信することができないため、サブバンドでは呼び出し操作を行なうことはできません。

ページャー動作で待ち受けしている局を呼び出す操作です。

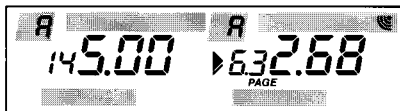
◎ページャー呼び出し

1. キーボードの **CODE PAGE** キーを押して、ページャー動作^{*1}またはトリガーページャー動作^{*2}に設定します。

※1：相手局が、他社のトランシーバーや当社の**FT-705**や**FT-24**などのトランシーバーを使ってページャー待ち受けを行なっているとき、(ディスプレイに“PAGE”の表示が点灯します。)



※2：相手局が、当方と同じ**FT-729**を使ってトリガーページャー動作で待ち受けを行なっているとき、(ディスプレイに“PAGE”と“☺”の表示が点灯します。)

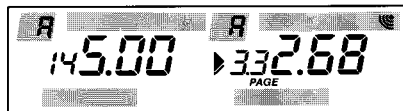


2. ページャー動作時には、キーボードの **MHz** / **MHz** キーはコードメモリーを選択用として動作しますので(ワンタッチページャー機能)、キーボードの **MHz** / **MHz** キーを使って

◎ 個別呼び出しで呼び出すときには相手局の個別コード




◎ グループ呼び出しで呼び出すときには相手局が属しているグループのグループコード



がメモリーしてあるコードメモリーにあわせませう。

3. この状態で送信すると、上記2.の項で設定した相手局の個別(またはグループ)コードと自局の個別コードを送信の初めに連続して自動送出し、ページャー動作で待ち受けしている局を呼び出すことができます。

 呼び出したい局のページャーコードがコードメモリーに設定してないときには、67ページの“マニュアル操作による呼び出し方法”により行ないます。

アドバイス トリガーページャー動作でページャー呼び出しを行なった場合には、そのまま相手局と交信することができます。

◎コードスケルチ呼び出し

コードスケルチ動作で待ち受けしている局を呼び出す操作です。


1. キーボードの **CODE (PAGE)** キーを3回押して、コードスケルチ動作に設定します。(ディスプレイに“CODE”の表示が点灯します。)



2. 次にキーボードの **(EM)** キーと **CODE (PAGE)** キーを続けて順に押してページャーコードの設定モードにし、**DIAL** ツマミまたはキーボードの **(MH)** / **(MH)** キーを使って個別呼び出しで呼び出すときには相手局の個別コード、グループ呼び出しで呼び出すときには相手局が属しているグループのグループコードがメモリーしてあるコードメモリーにあわせ、再度 **CODE (PAGE)** キーを押してコードスケルチ動作に戻します。



3. この状態で送信すると、上記2.の項で設定した個別(またはグループ)コードを送信の初めに自動送出し、コードスケルチ動作で待ち受けをしている局を呼び出すことができます。

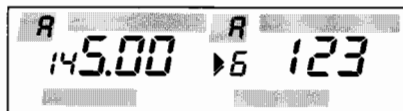
 呼び出したい局のページャーコードがコードメモリーに設定してないときには、67ページの“マニュアル操作による呼び出し方法”により行ないます。

着呼禁止機能

着呼禁止機能とは、ページャー動作で特定局からの呼び出しを待っているときに、自局とは関係のないグループコードでは呼ばれないようにするための機能です。

本機では、ページャー動作時に呼び出し操作を受けると、相手局の発するページャーコードが自局のコードメモリーに設定してあるページャーコードのいずれかと一致すれば、自動的に相手局の信号を受信するため、自局には関係のないグループのグループコードなどを設定してある場合には、そのページャーコードを受信しても相手局の信号が受信できてしまいます。そのような誤動作が起こらないよう、下記の方法で着呼禁止機能を動作させます。

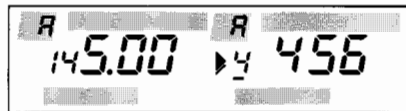
1. まず初めに、キーボードの **MEM** キーと **CODE PAGE** キーを続けて順に押してページャーコードの設定モードにします。
2. つぎに、DIALツマミまたはキーボードの **▲** / **▼** キーを操作するとコードメモリーが順番に切り換わりますので、着呼禁止機能を動作させたいページャーコードが設定してあるコードメモリーにあわせませう。
3. この状態で再度 **MEM** キーを押すと、ディスプレイ内のコードメモリーのチャンネル番号表示の下に “_” 表示が消灯して、着呼禁止機能が動作します。



着呼禁止機能が動作しているコードメモリーのページャーコードでは、ページャー動作時には、呼び出し操作を受けても相手局の信号は受信できません。



コードスケルチ動作時には、着呼禁止機能の動作・解除にかかわらず、ページャーコードが一致すれば相手局の信号を受信することができます。



着呼禁止機能 “解除”



着呼禁止機能 “動作”

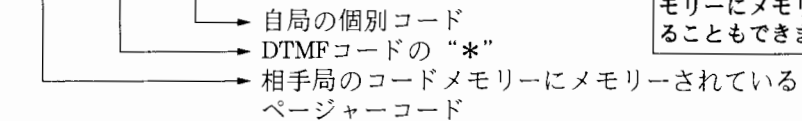
4. **MEM** キーは押すたびに、“_” の表示が消灯、点灯を繰り返し、着呼禁止機能が **動作** → **解除** → **動作**…… の動作を繰り返します。
5. 最後に **CODE PAGE** キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、着呼禁止機能の設定操作は完了します。

マニュアル操作による呼び出し方法

呼び出したい局のページャーコードがコードメモリーに設定してないときには、本機のDTMF内蔵キーボードより直接DTMFコードを送出して、マニュアル操作で呼び出しを行ないます。

ページャー運用時に、本機が送信の初めに自動送出するページャーコードは、ページャー動作時には：○○○ * ●●●

このページャーコードの組み合わせは、本機のDTMFメモリーにメモリーして運用することもできます。



コードスケルチ動作時には：○○○ → 相手局のコードメモリーにメモリーされているページャーコード

の順で送出しますので、本機のDTMF内蔵キーボードより、上記の順番でDTMFコードを送出すれば、相手局を呼び出すことができます。

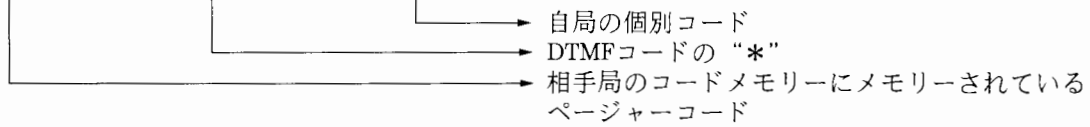


自局の個別コードが567で、ページャーコード123でページャー動作で待ち受けをしている局を呼び出す場合

PTTスイッチを押しながら本機のDTMF内蔵キーボードより、



とキー操作します。



DTMFモード

本機には、ページャーコードや電話番号などのDTMFコードを最大15桁までメモリーすることのできる、10チャンネル(チャンネル番号“0”～“9”)のDTMFメモリーチャンネルがあります。

●DTMFメモリーセット

DTMFメモリーチャンネルにDTMFコードをメモリーするための操作です。

1. キーボードの **MEM** キーと **DTMF CALL** キー続けて順に押すと、ディスプレイに“**☎**”の表示が点灯してDTMFモードになります。



2. DTMFモードのときに再度 **MEM** キーを0.5秒以上押し続けると、ディスプレイに点滅するメモリーチャンネル番号(この番号はDTMFメモリーチャンネルの番号ではありません)が現れますので、メモリーしたいDTMFメモリーチャンネルのチャンネル番号をキーボードの数字キーで設定します。

The diagram shows a digital display with a "8" in the top left corner. The main display shows "145.00" followed by a right-pointing arrow and a vertical bar. Below the vertical bar are three numbered circles: ①, ②, and ③. A call icon (☎) is visible in the bottom right corner of the display area.

DTMFメモリーチャンネルのチャンネル番号を設定すると、ディスプレイのメインバンド表示が、下に示したような表示に変わります。


- 1: DTMFメモリーチャンネルのチャンネル番号(0～9)
この場合は、DTMFメモリーチャンネル“1”
- 2: DTMFメモリーチャンネルの桁表示(01～15)
この場合は、DTMFメモリーチャンネルの先頭桁
- 3: DTMFメモリーチャンネルの桁にメモリーされているDTMFコード(0～9, A, b, c, d, E, F)
この場合は、DTMFコードの“1”

3. もう一度 **MEM** キーを0.5秒以上押し続けると、DTMFメモリーチャンネルのチャンネル番号表示が点灯から点滅に変わりますので、メモリーしたいDTMFコードをキーボードより順番に入力して行きます。






アドバンス

途中で入れ間違えたときには、PTTスイッチをワンタッチで押すと上記2の状態に戻りますので、再度このステップの操作を繰り返します。


4. DTMFコードの入力が終わりましたら最後に  キーを押します。DTMFメモリーチャンネルのチャンネル番号表示が点滅から点灯に変わり、メモリー完了です。

アドバイス


DTMFコードを15桁全部に入力すると、 キーを押さなくても自動的にメモリー完了になります。

5. この状態でキーボードの  /  キーを操作すれば、希望のDTMFコードが正しくメモリーされているかを確認することができます。

またこのときに、**DIAL**ツマミにより他のDTMFメモリーチャンネルを呼び出すことができますので、上記3.と4.の操作を繰り返し、他のDTMFメモリーチャンネルにもDTMFコードをメモリーします。

6. もう一度  キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、DTMFメモリーセット操作は完了します。

●DTMFメモリーの呼び出し




DTMFモード時(ディスプレイに“”の表示が点灯しているとき)、送信中にキーボードの数字キーでDTMFメモリーチャンネルのチャンネル番号を押すと、そのDTMFメモリーチャンネルにメモリーされているDTMFコードが送出されます。



◎ DTMFコードの送出中は、**PTT**スイッチを押さなくても送信状態は保持されます。

◎ DTMFコードの送出スピードは、99ページの“DTMFコードの送出スピード切り換え操作”により、“100mS”または“150mS”のどちらかを選ぶことができます。(工場出荷時には、DTMFコードの送出スピードは、“150mS”に設定してあります。)

●DTMFモードの解除

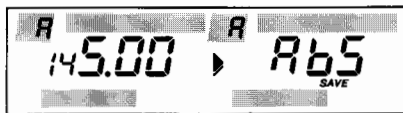
キーボードの  キーと  キー続けて順に押すと、ディスプレイの“”表示が消灯し、DTMFモードは解除されます。

バッテリーセーブ運用

バッテリーセーブ運用とは、受信時において信号の入感がないときに、CPU以外への電源供給を断続的に行ない、電池の消耗を少なくする運用方法です。

なお、電源の供給を休止している時間(バッテリーセーブタイム)はバッテリーセーブ“OFF”を含めて10種類あり(下表参照)、その中から1つを選んで設定することができます。

1. キーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定してあるバッテリーセーブタイムを約3秒間表示します。




2. ディスプレイにバッテリーセーブタイムを表示している間に、下表を参考にして、希望のバッテリーセーブタイムになるよう、キーボードの数字キーで設定します。
3. キーボードよりバッテリーセーブタイムを設定すると、ディスプレイの表示が設定したバッテリーセーブ

ブタイムを約2秒間表示した後に運用周波数表示に戻り、バッテリーセーブ運用が始まります。

4. バッテリーセーブ運用中は、ディスプレイに“SAVE”の表示が点滅します。



5. バッテリーセーブ運用中に信号が入感すると、バッテリーセーブ運用は一時休止してその信号を受信し、信号がなくなると約3秒後に再びバッテリーセーブ運用を再開します。

 ◎ バッテリーセーブ運用が一時休止しているときには、ディスプレイの“SAVE”表示は点滅から点灯に変わります。

◎ 信号が入感していなくても、スケルチが開いてノイズが聞こえているときや送信中、スキャン操作中でも、バッテリーセーブ機能は一時休止します。

◎ 本機をポケット通信などのデータ通信に使用するときには、バッテリーセーブタイムを**OFF**または**10mS**~**20mS**の間に設定して運用してください。




バッテリーセーブ表

※電源供給時間は、常時30mSです。
ABS=Automatic Battery Save

キー操作	バッテリーセーブタイム (mS)	バッテリーセーブレシオ (供給: 休止)	キー操作	バッテリーセーブタイム (mS)	バッテリーセーブレシオ (供給: 休止)
TONER 	10	1 : 0.33	REPT 	320	1 : 10.67
T.SET 	20	1 : 0.67	STEP 	640	1 : 21.33
LOW 	40	1 : 1.33	VOX 	1280	1 : 42.67
SAVE 	80	1 : 2.67	XFER 	(ABS) 権号の入感状況により、バッテリーセーブタイムが“10mS”から“1280mS”間を変化します	
LOCK 	160	1 : 5.33	SET 	OFF	—

VOX運用

本機には、自分の音声で送受信を切り換えることができるVOX回路を内蔵していますので、オプションのヘッドセット“YH-2”を使用すれば、交信中でも両手が自由に使える“ハンズフリーオペレーション(VOX運用)”が行なえます。

1. キーボードの  キーをワンタッチで押すと、ディスプレイに“**F**”の表示が点灯しますので、ディスプレイに“**F**”の表示が点灯している間(約5秒間)に  キーを押すと、VOX回路の動作状態が  キーを押すたびに右記に示す動作を繰り返しますので、周囲の状況に合わせて運用状態を選択します。
2. 設定終了後、PTTスイッチを押すか、そのまま約2秒間経過すると、ディスプレイの表示は運用周波数表示に戻り、VOX運用が行なえます。



VOX回路が動作しているときには、ディスプレイに“**V**”の表示が点灯します。



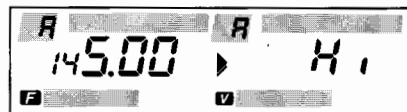
3. VOX回路が動作しているときにヘッドセットのマイクロホンに向かって送話すると、自動的に送信状態になり、送話をやめると受信状態に戻ります。

アドバイス

送話をやめてから受信状態に戻るまでの時間は、次ページの“VOXディレータイムの変更操作”で変更することができます。

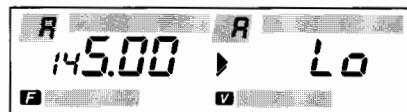
VOX “HI” (VOX運用：感度HI)

★VOX感度がHIの状態です。
通常はこの位置で使用します。



VOX “LOW” (VOX運用：感度LOW)

★VOX 感度がLOWの状態です。
周囲の雑音が激しいときには、この位置で使用します



VOX “OFF” (VOX運用解除)



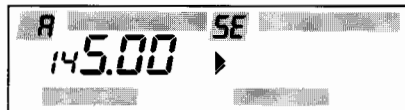
- ◎ ページャー運用中は、VOX運用は行なえません。
- ◎ 内蔵のマイクロホンやオプションのスピーカーマイク“MH-12A2B”などでは、VOX運用は行なえません。

なお、これらのマイクロホンを使用して運用するときには、VOX回路は必ず“OFF”にしてください。

VOXディレータイムの変更操作

VOX運用時に、言葉の切れ目で受信状態に戻ったり、話し終わってから受信状態に戻るまでの時間（VOXディレータイム）が速すぎると感じるときは、下記の方法によりVOXディレータイムを変更してください。（工場出荷時、VOXディレータイムは、500msに設定してあります。）

1. キーボードの **MEM** キーと **SET** キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。（セットモードの詳しい説明は、82ページをご覧ください。）



2. セットモード時にキーボードの **VOX** キーを押すと、ディスプレイに現在設定してあるVOXディレータイムを表示します。
3. この状態で再度 **VOX** キーを押すと、VOXディレータイムが **VOX** キーを押すたびに

500ms → 1S → 1.5S → 500ms ………

と切り換わりますので、希望する時間に設定します。

4. 設定終了後、再度 **SET** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、VOXディレータイムの変更操作は完了します。



VOXディレータイム “500ms”



VOXディレータイム “1s”



VOXディレータイム “1.5s”

ビープ機能

本機のキーボードはキーロック時(次ページ参照)に、下図に示すように、キー操作時に“ドレミ”の音程でビープ音を発しますので、音によるキー操作の確認が行なえます。また、各種機能の動作・停止時にもビープ音を発します。

なお、このビープ音は下記の操作を行なうことにより、“ON/OFF”することができます。

1. キーボードの **Ⓜ** キーと **TSET** キーを続けて順に押すと、ビープ音が“ON”のときには、ディスプレイに“b”の表示が点灯します。



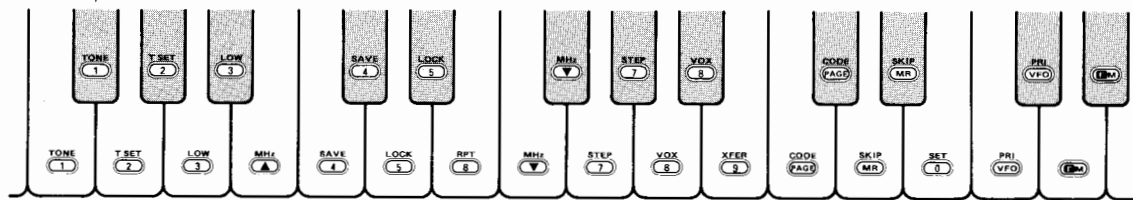
2. この状態で再度 **Ⓜ** キーを押すと、“b”の表示が消えてビープ音は“OFF”になります。



3. **Ⓜ** キーは押すたびに、“b”の表示が消灯・点灯を繰り返し、ビープ音が“ON” → “OFF” → “ON” → “OFF”……の動作を繰り返します。
4. 設定終了後、再度 **TSET** キーを押すと、ディスプレイの表示は運用周波数表示に戻り、ビープ音の“ON/OFF”操作は終了します。

注意 本機のビープ音の音程は、93ページの“ビープ音の変更操作”を行なうことにより、“ドレミ”の音程から“DTMF”の音程に変更することができます。

LAMPスイッチを押しながら押すと(黒鍵)



単独で押すと(白鍵)

ロック機能

本機には、誤って運用周波数が変わってしまったり送信してしまったりしないよう、キーボードやPTTスイッチなどを電氣的にロックすることができます。

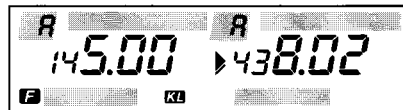
1. キーボードの **(EM)** キーをワンタッチで押すと、ディスプレイに **[F]** の表示が点灯しますので、ディスプレイに **[F]** の表示が点灯している間(約5秒間)に **(LOCK)** キーを押すと、ロック状態が **(LOCK)** キーを押すごとに、右記に示すように切り換わりますので、希望するロック状態に設定します。
2. 設定終了後、再度 **(EM)** キーを押すか、そのまま約2秒間経過すると、**[F]** の表示が消灯して、ロック機能の設定操作は完了します。



本機のロック機能は、84ページの“ダイヤルロック機能の“ON/OFF”操作”を行なうことにより、キーロック時にDIALツマミも、同時にロック状態になるようにすることができます。

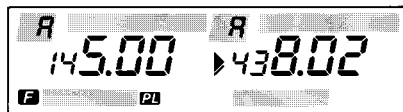
キーロック

- ★ディスプレイに **[KL]** の表示が点灯して、**(EM)** キーを除くキーボードのすべてのキーの動作を電氣的にロックします。



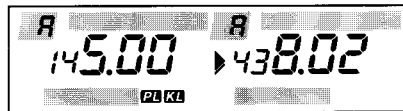
PTTロック

- ★ディスプレイに **[PL]** の表示が点灯して、PTTスイッチの動作を電氣的にロックします。



キーロック・PTTロック

- ★ディスプレイに **[PL]** と **[KL]** の表示が同時に点灯して、**(EM)** キーを除くキーボードのすべてのキーとPTTスイッチの動作を電氣的にロックします。



時計機能

本機には、24時間表示で動作する時計が内蔵してありますので、時計機能が“ON”の状態であればいつでも、ワンタッチで現在時刻を知ることができます。

また、この時計を利用して、

- ◎ 指定した時間に本機の電源を自動的に“ON/OFF”する“ON/OFFタイマー機能”
- ◎ 指定した時間にアラームが鳴る“タイマーアラーム機能”
- ◎ 交信開始時刻などをメモリーすることができる“ワンタッチタイマーメモリー”

を行なうことができます。



本機の時計精度は、周囲温度（寒冷地での使用や連続送信による内部温度上昇）により、変化しますのでご注意ください。

●時計機能の“ON/OFF”操作

1. キーボードの **Ⓜ** キーと **CLOCK** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定されている時刻を表示します。
2. この状態でキーボードの **LOCK** キーを押すと、時計機能の“ON/OFF”状態が **LOCK** キーを押すたびに、

時計機能“ON”（工場出荷状態）

★ディスプレイに下に示すような表示が点灯し、時計機能が動作します。



時計機能“OFF”

★ディスプレイに下に示すような表示が点灯し、時計機能の動作は停止します。

なお、時計機能が“OFF”のときには、以下に述べる時計機能に関するすべての機能は動作しませんのでご注意ください。

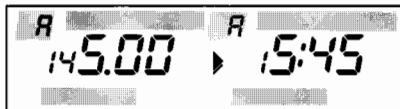


の動作を繰り返しますので、希望の状態になるように設定します。

3. 設定終了後、再度 **CLOCK** キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、時計機能の操作は完了します。

●時刻の合わせ方

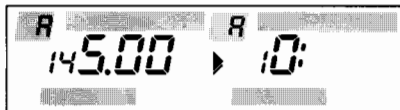
1. POWERスイッチをワンタッチで押して、電源を“ON”にします。
2. キーボードの **MEM** キーと **CLOCK** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定されている時刻を表示します。



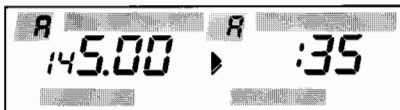
3. ディスプレイに時刻が表示されている間に再度 **MEM** キーを押すと、“時”の桁のみの表示になり、時刻の設定モードになります。



4. この状態でDIALツマミをまわすと、“時”の桁の値を変えることができますので、現在時刻の“時”の値を設定します。



5. 次にキーボードの **MH** キーを押すと、表示する桁が“分”の桁に移動しますので、同様にDIALツマミを操作して、現在時刻の“分”の値を設定します。



アドバイス キーボードの **MH** キーを押して、点灯する桁を“時”の桁に戻し、設定し直すこともできます。

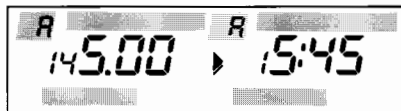
6. すべての桁の設定が終わりましたら、最後に **CLOCK** キーを押すと、設定した時刻の“0秒”から時計がスタートします。

アドバイス 最後に **CLOCK** キーを押すときには、テレビの時報や電話の時報サービス(117番：有料)に合わせて押すと、“秒”の値まで合った正確な時刻を設定することができます。

●ONタイマー機能

設定した時間になると、本機の電源が自動的に“ON”になる機能です。

1. **POWER**スイッチをワンタッチで押して、電源を“ON”にします。
2. キーボードの **(EM)** キーと **(CLOCK)** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定されている時刻を表示します。



3. 次にキーボードの **(TONE)** キーを押すと、“時”の桁が点滅を始めて、ONタイマー機能の設定モードになります。



4. 前記“時刻の合わせ方”の4と5を参考に、ON時間(自動的に電源が“ON”になる時間)を設定します。
5. この状態でキーボードの **(EM)** キーを押すと、ディスプレイに“ON”の表示が点灯して、ONタイマー機能が動作を始めます。

アドバイス

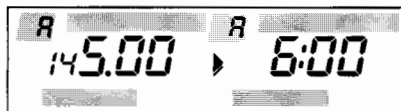
(EM) キーは押すたびに、ディスプレイの“ON”表示が点灯・消灯を繰り返し、ONタイマー機能が

動作 → 解除 → 動作 → 解除 ……………

と交互に切り変わります。



(ONタイマー機能“動作”)



(ONタイマー機能“解除”)

なお、ONタイマー機能が解除(ディスプレイの“ON”表示が消灯時)されているときは、ON時間を記憶しているだけで、設定した時間になっても電源は“ON”になりません。



6. 最後に **(CLOCK)** キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、ONタイマー機能の設定操作が完了します。
7. ONタイマー機能が動作しているときには、本機の電源が“OFF”の状態でも設定した時間(ON時間)になると、自動的に電源が“ON”になります。

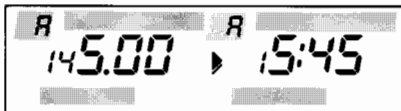
アドバイス


- ◎ ONタイマー機能で電源が入った場合でも、**POWER** スイッチを0.5秒以上押せば、電源を“OFF”にすることができます。
- ◎ ONタイマー機能と同時に79ページの“**タイマーアラーム機能**”を動作させておくと、電源が“ON”になったときにアラーム音が鳴るようにすることができます。

●OFFタイマー機能


設定した時間になると、本機の電源が自動的に“OFF”になる機能です。

1. POWERスイッチをワンタッチで押して、電源を“ON”にします。
2. キーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定されている時刻を表示します。




3. 次にキーボードの  キーを押すと、“時”の桁が点滅を始めて、OFFタイマー機能の設定モードになります。



4. 前記“時刻の合わせ方”の4.と5.を参考に、OFF時間（自動的に電源が“OFF”になる時間）を設定します。
5. この状態でキーボードの  キーを押すと、ディスプレイに“OFF”の表示が点灯して、OFFタイマー機能が動作を始めます。


アドバイス

 キーは押すたびに、ディスプレイの“OFF”表示が点灯・消灯を繰り返し、OFFタイマー機能が

と交互に切り変わります。



なお、OFFタイマー機能が解除（ディスプレイの“OFF”表示が消灯時）されているときは、OFF時間を記憶しているだけで、設定した時間になっても電源は“OFF”になりません。

6. 最後に  キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、OFFタイマー機能の設定操作が完了します。
7. OFFタイマー機能が動作しているときには、設定した時間（OFF時間）になると、自動的に電源が“OFF”になります。

動作 → 解除 → 動作 ……………

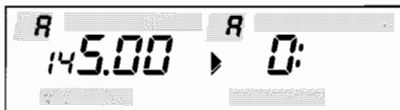
●タイマーアラーム機能

設定した時間になると、アラーム音が鳴る機能です。

1. **POWER**スイッチをワンタッチで押して、電源を“ON”にします。
2. キーボードの **MEM** キーと **CLOCK REV** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに現在設定されている時刻を表示します。



3. 次にキーボードの **LOW** キーを押すと、“時”の桁が点滅を始めて、タイマーアラーム機能の設定モードになります。



4. 前記“時刻の合わせ方”の4.と5.を参考に、アラーム時間(アラームが鳴る時間)を設定します。
5. この状態でキーボードの **MEM** キーを押すと、ディスプレイに“”の表示が点灯して、タイマーアラーム機能が動作を始めます。

アドバイス

MEM キーは押すたびに、右に示したようにディスプレイの“”表示が点灯・消灯を繰り返し、タイマーアラーム機能が

動作 → 解除 → 動作 …… と交互に切り変わります。

なお、タイマーアラーム機能が解除(ディスプレイの“”表示が消灯時)されているときは、アラーム時間を記憶しているだけで、設定した時間になっ

てもアラーム音は鳴りません。



(タイマーアラーム機能“動作”)



(タイマーアラーム機能“解除”)

6. 最後に **CLOCK REV** キーを押すと、ディスプレイの表示が運用周波数表示に戻り、タイマーアラーム機能の設定操作が完了します。
7. タイマーアラーム機能が動作しているときには、設定した時間(アラーム時間)になると、スピーカーから“ルルル”とアラーム音が鳴ります。なお、アラーム音を止める方法は、次の2種類があります。
 - ◎ キーボードのいずれかのキーを押す：一時停止 (スヌーズ動作：約3分後に再度アラーム音が鳴ります)
 - ◎ **PTT**スイッチをワンタッチで押す：完全停止

●ワンタッチタイマーメモリー



キーボードの **MEM** キーを0.5秒以上押し続けた後に **CLOCK REV** キーを押すと、 **CLOCK REV** キーを押したときの時間を一時的にメモリーすることができます。

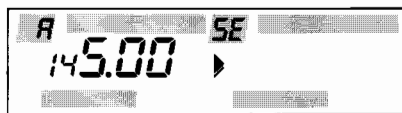
なお、メモリーした時間は、キーボードの **MEM** キーと **CLOCK REV** キーを続けて順に押した後に **CLOCK SKIP/MIR** キーを押すことにより、呼び出すことができます。





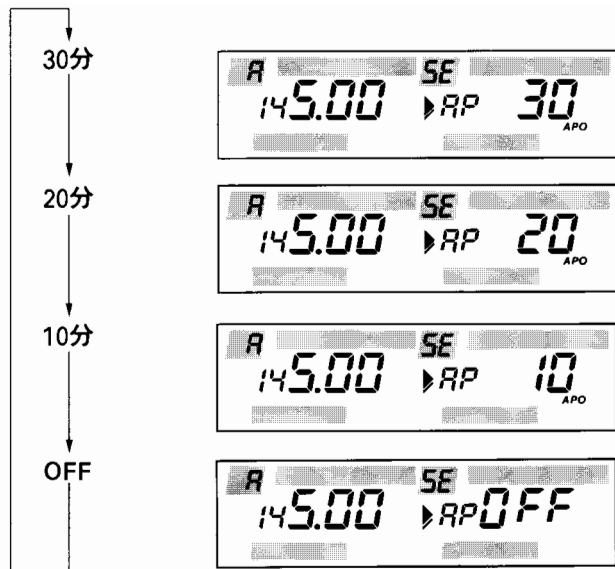
オートマチックパワーオフ(APO)機能


オートマチックパワーオフ機能とは、受信時において、あらかじめ決められた時間（パワーオフタイム）までに送信操作やDIAL操作・キーボード操作を行なわなかったときには、自動的に電源を“OFF”にする機能です。なお、パワーオフタイムは“10分、20分、30分、OFF（オートマチックパワーオフ機能“OFF”）”の4種類があり、その中から1つを選んで設定することができます。（工場出荷時には、パワーオフタイムは“OFF”に設定してあります。）


1. キーボードの  キーと  キーを続けて順に押し、本機をセットモードの状態にします。（セットモードの詳細説明は、82ページをご覧ください。）



2. セットモード時にキーボードの  キーを押すと、パワーオフタイムが  キーを押すたびに右に示すように切り換わりますので、希望する時間に設定します。



 パワーオフタイムを10分、20分、30分のいずれかに設定すると、ディスプレイに“APO”の表示が点灯します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、オートマチックパワーオフ機能の設定操作は完了します。
4. オートマチックパワーオフ機能が動作しているときには、上記 . の項で設定した時間（パワーオフタイム）の約1分前まで送信操作やDIAL操作・キーボード操作を行わないと、予告メロディー音が鳴って“APO”の表示が点滅します。

アドバイス

工場出荷時には、予告メロディー音は、本機にあらかじめメモリーされている曲が鳴りますが、90ページの“予告メロディー音の変更操作”を行なうことにより、DTMFメモリーチャンネル“1”に入れたデータの曲を鳴らすようにすることができます。

5. さらに、その約1分後に、自動的に電源が“OFF”になります。
6. オートマチックパワーオフ機能で電源が“OFF”になった場合でも、再度POWERスイッチを押せば、電源を入れることができます。

セットモード

セットモードとは、一度設定してしまえばその後変更する機会の少ない機能や動作の選択・設定操作を行なう状態のことをいい、この状態のときにキー操作をすると、付属の“セットモード時のキーボードの動作説明”に示した、各種機能の選択・設定を行なうことができます。

●セットモードへの移行方法

キーボードの **[MEM]** キーと **[SET 0]** キーを続けて順に押すと、ディスプレイのメインバンド表示が消灯して“SE”の表示のみとなり、セットモードに移行します。

付属のキー操作表に示すキー操作を行なって、各種の機能や動作の選択・設定操作を行なってください。



●ページャー運用時の送信ディレイタイムの切り換え操作 セットモード時の **[TONE 1]** キー操作

この操作は、ページャー運用時に、送信の初めに自動送出されるページャーコードの送信ディレイタイム（PTTスイッチを押した何秒後にページャーコードを自動送出するか）を切り換える操作です。なお、送信ディレイタイムは、“450mS”または“750mS”のどちらかを選択することができます。（工場出荷時には、送信ディレイタイムは“450mS”に設定してあります。）


1. セットモード時にキーボードの **[TONE 1]** キーを押すと、ディスプレイに現在設定してある送信ディレイタイムを表示します。
2. この状態で再度 **[TONE 1]** キーを押すと、送信ディレイタイムが **[TONE 1]** キーを押すたびに、

750mS → 450mS → 750mS → 450mS ……



と交互に切り換わりますので、どちらか希望する方の値に設定します。

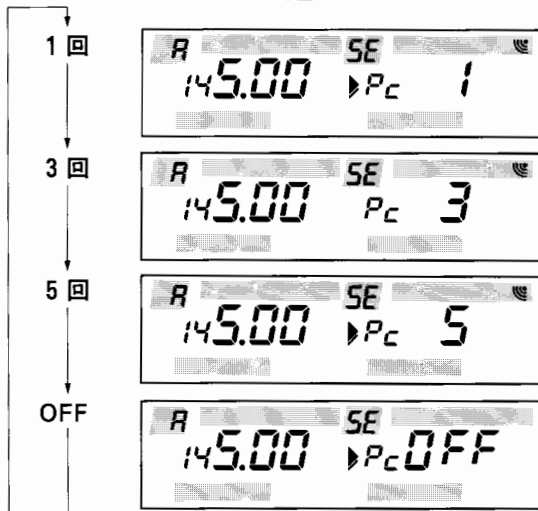
3. 設定終了後、再度 **[SET 0]** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、ページャー運用時の送信ディレイタイムの切り換え操作は完了します。



 レピーター局を通してページャー運用を行なうときには、誤動作防止のため、ページャー運用時の送信ディレイタイムを“750mS”に設定してください。

●呼び出し音の回数変更操作 セットモード時の TSET (2) キー操作

この操作は、ページャー運用時の、呼び出し音の鳴る回数を設定する操作です。なお、呼び出し音の鳴る回数は、(1回、3回、5回、呼び出し音“OFF”)の4種類があり、その中から1つを選んで設定することができます。(工場出荷時には、呼び出し音の鳴る回数を5回に設定してあります。)

1. セットモード時にキーボードの TSET (2) キーを押すと、呼び出し音の鳴る回数が TSET (2) キーを押すたびに、



と切り換わりますので、希望する回数に設定します。
 呼び出し音の鳴る回数を1回、3回、5回のいずれかに設定すると、ディスプレイに“”の表示が点灯します。

2. 設定終了後、再度 TSET (0) キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、呼び出し音の回数変更操作は完了します。

●ダイアルロック機能の“ON/OFF”操作 セットモード時の^{LOCK}5キー操作

この操作は、本機がキーロック状態(74ページ参照)のとき、DIALツマミも同時にロック状態に“する(ON)”か“しない(OFF)”かを選択する操作です。(工場出荷時には、ダイアルロック機能は“OFF”に設定してあります。)

1. セットモード時にキーボードの^{LOCK}5キーを押すと、ディスプレイに“dL on”の表示が点灯して、ダイアルロック機能が“ON”になります。



2. この状態で再度^{LOCK}5キーを押すと、ディスプレイの“dL on”表示が“dL OFF”に変わり、ダイアルロック機能が“OFF”になります。

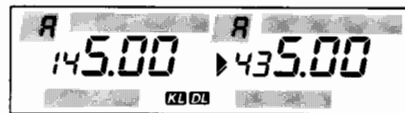


^{LOCK}5キーは押すたびに、ダイアルロック機能が
“ON” → “OFF” → “ON” → “OFF” ……

の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度^{SET}6キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、ダイアルロック機能の“ON/OFF”操作は完了します。

4. ダイアルロック機能が“ON”のときにキーロック操作を行うと、ディスプレイに“LK”の表示が点灯して、DIALツマミの動作も電氣的にロックされます。



●BUSYインジケータの“ON/OFF”操作 セットモード時の^{STEP}7キー操作

本機では、電池の消耗を極力少なくするため、受信時に点灯するBUSYインジケータの動作を(144MHz帯と430MHz帯とを個別に)“OFF”(信号を受信してもBUSYインジケータは点灯しない)にすることができます。



現在、サブバンドに設定されている方のバンドのBUSYインジケータの動作を“OFF”にするときには、セットモードへ移行する前に、キーボードの^{GM}キーと^{SUB}キーを続けて順に押して、サブバンド周波数の左側に点滅する“▶”を表示させてから行なってください(サブバンドオペレーション)。

なお、サブバンドに対してセットモード操作を行なうときには、ディスプレイの144MHz帯の表示が消灯して“SE”の表示のみとなり、セットモードに移行します。

1. セットモード時にキーボードの^{STEP}7キーを押すと、BUSYインジケータが点滅するとともにディスプレイに“OFF”の表示が点灯し、受信時に信号が入感してもBUSYインジケータは点灯しなくなります。



2. この状態で再度^{STEP}7キーを押すと、ディスプレイの“OFF”表示が“on”に変わり、信号が入感したときにBUSYインジケータが点灯するようになります。




^{STEP}7キーは押すたびに、BUSYインジケータが“消灯(OFF)”→“点灯(ON)”→“消灯(OFF)”…の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度^{SET}キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、BUSYインジケータの“ON/OFF”操作は完了します。

● ページャー自動応答機能の“ON/OFF”操作 セットモード時の キー操作

この操作は、ページャー運用時にページャー動作で待ち受け操作を行なっているときの、応答方法を選択する操作です。


ページャー動作で待ち受け操作を行なっているときに呼び出しを受けた場合の応答方法は、ページャー自動応答機能が“OFF”のときにはPTTスイッチを押さなければ応答することができませんが、ページャー自動応答機能を“ON”にすると、呼び出しを受けると自動的に相手局の個別コードと自局の個別コードを送信して応答することができます。

1. セットモード時にキーボードの  キーを押すと、ディスプレイに“PA on”の表示が点灯して、ページャー自動応答機能が“ON”になります。




2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“PA on”表示が“PA OFF”に変わり、ページャー自動応答機能が“OFF”になります。



 キーは押すたびに、ページャー自動応答機能が

“ON” → “OFF” → “ON” → “OFF” ……

の動作を繰り返します。



3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、ページャー自動応答機能の“ON/OFF”操作は完了します。






IBS機能が動作しているときは、この機能は動作しません。

●ワンタッチページャー機能の“ON/OFF”操作 セットモード時の キー操作

ワンタッチページャー機能とは、ページャー運用時のコードメモリーを選択を簡単な操作で行えるようにする操作です。(工場出荷時には、ワンタッチページャー機能は“ON”の状態になっています。)

ワンタッチページャー機能が“ON”のときには、運用周波数表示の100MHz桁にコードメモリーのチャンネル番号を表示し、運用周波数またはメモリーチャンネルの変更はDIALツマミ、コードメモリーの選択は  /  キーで行えるようになります。


ただし、ページャー運用中にスキャン操作をする場合などのように、キーボードの  /  キーで運用周波数やメモリーチャンネルの変更操作をしたいときには、ワンタッチページャー機能を“OFF”にしてください。


1. セットモード時にキーボードの  キーを押すと、ディスプレイに“OP on”の表示が点灯して、ワンタッチページャー機能が“ON”になります。



2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“OP on”表示が“OP OFF”に変わり、ワンタッチページャー機能が“OFF”になります。



 キーは押すたびに、ワンタッチページャー機能が“ON” → “OFF” → “ON” → “OFF” ……の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、ワンタッチページャー機能の“ON/OFF”操作は完了します。

●受信音の切り換え操作

セットモード時の VFO キー操作

この操作は、本体上面部のEARジャックに出力される受信音を切り換える（“144MHz帯の受信音を出力するか？”あるいは“430MHz帯の受信音を出力するか？”）操作です。

本機は工場出荷時、EARジャックにイヤホンなどを接続すると、内蔵スピーカーの動作が止まり、デュアル受信時にはイヤホンから430MHz帯と144MHz帯の受信音が同時に出力されますが、キー操作により144MHz帯と430MHz帯の受信音を

- ◎ 430MHz帯バンド：内蔵スピーカー
- 144MHz帯バンド：EARジャック
- ◎ 430MHz帯バンド：EARジャック
- 144MHz帯バンド：内蔵スピーカー
- ◎ 430MHz帯バンド、144MHz帯バンドともEARジャック

の3通りに切り換えて運用することができます。

1. セットモード時にキーボードの VFO キーを押すと、“現在どちらの受信音（430MHz帯または144MHz帯）がEARジャックに出力されているか？”をディスプレイに表示します。

2. この状態で再度 VFO キーを押すと、EARジャックに出力される受信音が、 VFO キーを押すたびに

- ◎ 144MHz帯の受信音（430MHz帯の受信音は、内蔵スピーカーから出力されません。）



- ◎ 430MHz帯の受信音（144MHz帯の受信音は、内蔵スピーカーから出力されません。）



- ◎ 430MHz帯・144MHz帯両方の受信音（内蔵スピーカーの動作は停止します。）






- と切り換わりますので、希望する状態に設定します。
3. 設定終了後、再度 VFO キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、受信音の切り換え操作は完了します。




EARジャックにイヤホンなどを接続しても、内蔵スピーカーから若干音が漏れますが、故障ではありません。

●呼び出し音の確認操作


セットモード時の  キー操作

1. セットモード時にキーボードの  キーを押すと、スピーカーから“ピロロロ”とページャー動作およびベル運用時の呼び出し音が鳴りますので、呼び出し音の調節をすることができます。
2. 確認後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、呼び出し音の確認操作は完了します。


●レピーター運用時のSQL OFFスイッチの動作変更操作

セットモード時の  キー操作


この操作は、レピーター運用時にSQL OFFスイッチを押したときスケルチ回路の動作を一時的に解除するとともに送受信周波数を反転（リバース運用）させ、相手局がレピーター局に向けて送信している周波数をクリアに受信できるようにする操作です。

1. セットモード時にキーボードの  キーを押すと、ディスプレイに“rE on”の表示が点灯して、SQL OFFスイッチに連動して送受信周波数も同時に反転するようになります。




2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“rE on”表示が“rE OFF”に変わり、SQL OFFスイッチを押しても送受信周波数は反転しなくなります。



 キーは押すたびに、SQL OFFスイッチに連動して送受信周波数が



“反転する” → “反転しない” → “反転する” ……
の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、レピーター運用時のSQL OFFスイッチの動作変更操作は完了します。

●送信ホールド機能の“ON/OFF”操作 セットモード時の キー + キー操作

この操作は、キー操作によりDTMF信号を送出するときの、送信ホールド機能を“ON/OFF”する操作です。


本機は工場出荷時、キー操作によりDTMF信号を送出する場合、キーを離すと直ちに受信状態に戻りますが、送信ホールド機能を“ON”にすると、キーを離れた後も約2秒間送信状態を保持するようになります。

1. セットモード時にキーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“th on”の表示が点灯して、送信ホールド機能が“ON”になります。



2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“th on”表示が“th OFF”に変わり、送信ホールド機能が“OFF”になります。



 キーは押すたびに、送信ホールド機能が

- “ON (キー操作後2秒間送信状態を保持)”
 - ← “OFF (キー操作後ただちに受信状態に戻る)”
- の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、送信ホールド機能の“ON/OFF”操作は完了します。


●予告メロディー音の変更操作 セットモード時の キー + キー操作

この操作は、オートマチックパワーオフ機能動作時の予告メロディー音を変更する操作です。


本機は工場出荷時、本機にあらかじめメモリーされている曲(イニシャルイズ曲)が予告メロディー音として鳴るように設定されていますが、この操作を行なうことにより、予告メロディー音をDTMFメモリーチャンネル“1”に入れたデータの曲で鳴らすようにすることができます。

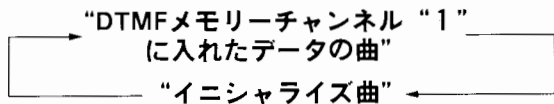
1. セットモード時にキーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“AP dt”の表示が点灯して、DTMFメモリーチャンネル“1”に入れたデータの曲が予告メロディー音として鳴るようになります。




2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“AP dt”表示が“AP b”に変わり、ふたたびイニシャルイズ曲が予告メロディー音として鳴るようになります。



 キーは押すたびに、予告メロディー音が



の動作を繰り返します。

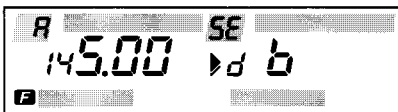
3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、予告メロディー音の変更操作は完了します。

●DTMFモニター音の変更操作

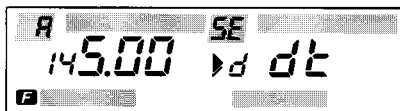
セットモード時の **MEM** キー + **SAVE 4** キー操作

本機は工場出荷時、DTMFメモリーチャンネルにメモリーしたDTMFコードのデータは、“DTMFの音程”でモニターできますが、DTMFコードのデータを“ドレミの音程”でモニターできるように変更することができます。

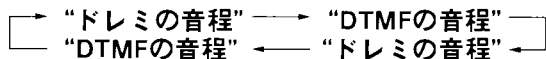
1. セットモード時にキーボードの **MEM** キーと **SAVE 4** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“d b”の表示が点灯して、DTMFメモリーチャンネルにメモリーしたDTMFコードを“ドレミの音程”でモニターすることができますようになります。



2. この状態で再度 **SAVE 4** キーを押すと、ディスプレイの“d b”表示が“d dt”に変わり、ふたたびDTMFコードのデータを“DTMFの音程”でモニターできるようになります。



SAVE 4 キーは押すたびに、DTMFコードのモニター音が



の動作を繰り返します。





DTMFコードのモニター音を“ドレミ”の音程に設定すると、DTMFコードを送信することができなくなります。

3. 設定終了後、再度 **SET 0** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、DTMFモニター音の変更操作は完了します。

●ビープ音の変更操作

セットモード時の キー + キー操作


本機は工場出荷時、キー操作を行なうと、そのキーに対応する“ドレミの音程”でビープ音がなりますが、ビープ音を“DTMFの音程”で鳴らすように変更することができます。

1. セットモード時にキーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“b dt”の表示が点灯して、キー操作時のビープ音が“DTMFの音程”になります。




2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“b dt”表示が“b b”に変わり、ふたたびキー操作時のビープ音が“ドレミの音程”で鳴るようになります。



 キーは押すたびに、キー操作時のビープ音が




の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、ビープ音の変更操作は完了します。


●1kHz桁入力の“ON/OFF”操作

セットモード時の キー + キー操作


この操作は、DIRECT TUNING時のキー入力操作を、現在設定してあるステップ幅に関わらず、1kHzの桁までの入力を有効にする操作です。

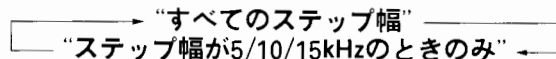
1. セットモード時にキーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“1k on”の表示が点灯して、DIRECT TUNING時のキー入力操作が、現在設定してあるステップ幅に関わらず、すべてのステップ幅において1kHzの桁まで有効になります。




2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“1k on”表示が“1k OFF”に変わり、ふたたび1kHz桁入力が可能なステップ幅が“5/10/15kHzのときのみ”になります。



 キーは押すたびに、DIRECT TUNING時の1kHz桁入力の可能なステップ幅が



の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、DIRECT TUNING時の1kHz桁入力の“ON/OFF”操作は完了します。

●DTMFコードの出力“ON/OFF”操作

セットモード時の **(M)** キー + **(B)** キー操作 (ROW出力)
 セットモード時の **(M)** キー + **(9)** キー操作 (COLM出力)

本機では、DTMFコードのROW出力とCOLM出力を、個別に“ON/OFF”することができます。

1. セットモード時に

- ①：キーボードの **(M)** キーと **(B)** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“r OFF”の表示が点灯して、DTMFコードのROW出力が“OFF”になります。



- ②：キーボードの **(M)** キーと **(9)** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“c OFF”の表示が点灯して、DTMFコードのCOLM出力が“OFF”になります。



2. この状態（ディスプレイに“F”の表示が点灯している約2秒間の間）で再度

- ①： **(B)** キーを押すと、ディスプレイの“r OFF”表示が“r on”に変わり、ふたたびROW出力が“ON”になります。



- ②： **(9)** キーを押すと、ディスプレイの“c OFF”表示が“c on”に変わり、ふたたびCOLM出力が“ON”になります。



- (B)** キーおよび **(9)** キーは押すたびに、DTMFコードの出力が

“OFF” → “ON” → “OFF” → “ON” ……

の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度 **(SET)** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、DTMFコードの出力“ON/OFF”操作は完了します。





DTMFコードの出力を“OFF”にすると、ページャー運用の呼び出し操作が行えなくなりますのでご注意ください。

●呼び出し音の動作変更操作


セットモード時の キー + キー操作

この操作は、ページャー動作時に呼び出しを受けたとき鳴る、呼び出し音の動作を変更する操作です。


本機は工場出荷時、ページャー動作時に呼び出しを受けると、呼び出しを受けたときのみ呼び出し音が鳴って、その後は応答するまでディスプレイの表示が点滅するだけですが、呼び出しを受けると応答するまで1分おきに、呼び出し音が鳴るようにすることができます。

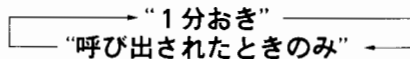
1. セットモード時にキーボードの  キーと  キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“cr on”の表示が点灯して、呼び出しを受けると応答するまで1分おきに、呼び出し音が鳴るようになります。




2. この状態で再度  キーを押すと、ディスプレイの“cr on”表示が“cr OFF”に変わり、ふたたび呼び出しを受けたときのみ呼び出し音が鳴るようになります。



 キーは押すたびに、呼び出し音の動作が



の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度  キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、呼び出し音の動作変更操作は完了します。

●呼び出し音の変更操作

セットモード時の **MEM** + **DTMF CALL** キー操作

この操作は、ベル運用およびページャー運用時の呼び出し音を変更する操作です。

本機は工場出荷時、ベル運用およびページャー運用時の呼び出し音は、本機にあらかじめメモリーされている曲（イニシャルイズ曲）が鳴るように設定されていますが、この操作と92ページの“DTMFモニター音の変更操作”を行なうことにより、

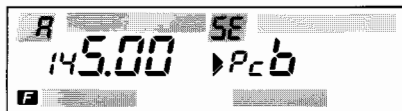
- ▶144MHz帯で呼び出しを受けたときにはDTMFメモリーチャンネル“2”に入れたデータの曲
- ▶430MHz帯で呼び出しを受けたときにはDTMFメモリーチャンネル“3”に入れたデータの曲

が鳴るように変更することができます。

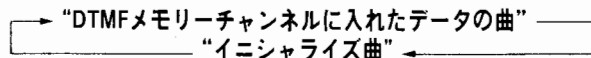
1. セットモード時にキーボードの **MEM** キーと **DTMF CALL** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“Pc dt”の表示が点灯して、DTMFメモリーチャンネルに入れたデータの曲が呼び出し音として鳴るようになります。



2. この状態で再度 **DTMF CALL** キーを押すと、ディスプレイの“Pc dt”表示が“Pc b”に変わり、ふたたび呼び出し音がイニシャルイズ曲で鳴るようになります。



DTMF CALL キーは押すたびに、呼び出し音が



の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度 **SET** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、呼び出し音の変更操作は完了します。

●DTMFコードの送出スピード切り換え操作 セットモード時の **MEM** キー + **CLOCK** キー操作

この操作は、DTMFメモリーチャンネルにメモリーしたDTMFコードの送出スピードを切り換える操作です。なお、DTMFコードの送出スピードは、“150mS”または“100mS”のどちらかを選択することができます。（工場出荷時には、DTMFコードの送出スピードは“150mS”に設定してあります。）

1. セットモード時にキーボードの **MEM** キーと **CLOCK** キーを続けて順に押すと、ディスプレイに“dS 100”の表示が点灯して、DTMFコードの送出スピードが“100mS”に切り換わります。



2. この状態（ディスプレイに“F”の表示が点灯している約5秒間の間）で再度 **CLOCK** キーを押すと、ディスプレイの“dS 100”表示が“dS 150”に変わり、ふたたびDTMFコードの送出スピードが“150mS”に戻ります。



CLOCK キーは押すたびに、DTMFコードの送出スピードが

“100mS” → “150mS” → “100mS” ……

の動作を繰り返します。

3. 設定終了後、再度 **SET** キーを押すと、ディスプレイの表示がセットモードにする前の表示に戻り、DTMFコードの送出スピード切り換え操作は完了します。

バックアップ機能

本機には、メモリーチャンネルの内容や電源スイッチを切る前に設定してあった運用状態を記憶する、バックアップ機能を備えています。

なお、本機には、バックアップ機能を動作させるためのバックアップ用電池が組み込んでありますので、電池ケース(パック)を外した場合でも、メモリー等CPUの内容を記憶し続けることができます。

また、メモリーチャンネル内に書き込まれている全てのデータを消去したいときには、次の手順で本機を初期状態に戻してください。

1. **POWER**スイッチを0.5秒以上押し続けて、電源を“OFF”にします。
2. キーボードの **SKIP** (MR) キーと **PRI** (VFO) キーを押しながら **POWER**スイッチを押して、電源を“ON”にします。以上で本機は初期状態に戻ります。

アドバイス

バックアップ機能が動作しなくなり、バックアップ用電池(リチウム電池)の消耗と思われましたら、13ページの“バックアップ用電池(リチウム電池)の取り付けかた”を参考に、バックアップ電池を交換してください。

故障かな?と思ったら

修理を依頼する前に、ちょっとお確かめください。

■電源が入らない!

- 乾電池は正しく電池ケースに挿入してありますか?
- 乾電池は指定通りに、プラス(+) マイナス(-)の極性を間違えず、正しく電池ケースに挿入してください(12ページ参照)。
- 外部電源の接続は間違っていますか?
- 外部電源を使用するときには、必ずオプションの外部電源ケーブル“E-DC-6”またはノイズフィルター付き外部電源ケーブル“E-DC-5B”を使用してください。

なお、E-DC-6を使用するときには事故防止のため、必ずヒューズ(3A)を併用し、ケーブルの赤/黒線を電源のプラス(+)に、黒線をマイナス(-)に接続してください(5ページ参照)。

- 電池または電源の電圧は正常ですか?
- 本機の動作電圧範囲は5.5~16.0Vです。この範囲内の電圧でご使用ください(5ページ参照)。

■音が出ない!!

- VOLツマミを反時計方向にまわしすぎていませんか? (18ページ参照)
- SQLツマミを時計方向にまわしすぎていませんか? (18ページ参照)
- トーンスケルチ運用またはベル運用になっていませんか?
- トーンスケルチ運用またはベル運用中は、自局の設定したトーン信号と同じ周波数のトーン信号を伴った信号を受信するまで、音は出ません (55ページ参照)。
- ページャー運用になっていませんか?
- ページャー運用中は、自局のコードメモリーにメモリーしてある、いずれか1つのページャーコードと同じ組み合わせのページャーコードを受信するまで、音は出ません (59ページ参照)。
- 外部スピーカーの接続は間違っていないですか? (7ページ参照)
- 電池または電源の電圧は正常ですか?
- 本機の動作電圧範囲は5.5~16.0Vです。この範囲内の電圧でご使用ください (5ページ参照)。

■電波が出ない!!!

- PTTスイッチは確実に押していますか? (24ページ参照)
- PTTロック状態になっていませんか?
- ディスプレイに“**■**”の表示が点灯しているときにはPTTスイッチがロックされている状態です。PTTロックを解除してください (74ページ参照)。
- アンテナは確実に接続してありますか?
- アンテナは必ず、付属のホイップアンテナ“YHA-29”またはインピーダンスが50Ωの144MHz/430MHz帯用デュアルバンドアンテナを使用してください (4ページ参照)。
- V&V運用またはU&U運用になっていませんか?
- V&V運用またはU&U運用時に、送信できない周波数をメインバンドに設定すると、PTTスイッチを押したときに“**E r r**”の表示が出て、送信状態になりません (29ページ参照)。
- 送信オフセット運用で、送信時にオフバンドになっていませんか?
- 送信時にオフバンドになると、ディスプレイに“**E r r**”の表示が出て、送信状態になりません (52ページ参照)。
- 電池または電源の電圧は正常ですか?
- 本機の動作電圧範囲は5.5~16.0Vです。この範囲内の電圧でご使用ください。また送信時に、電圧降下を起こすような電源では、本機の性能を十分に発揮することはできません (5ページ参照)。

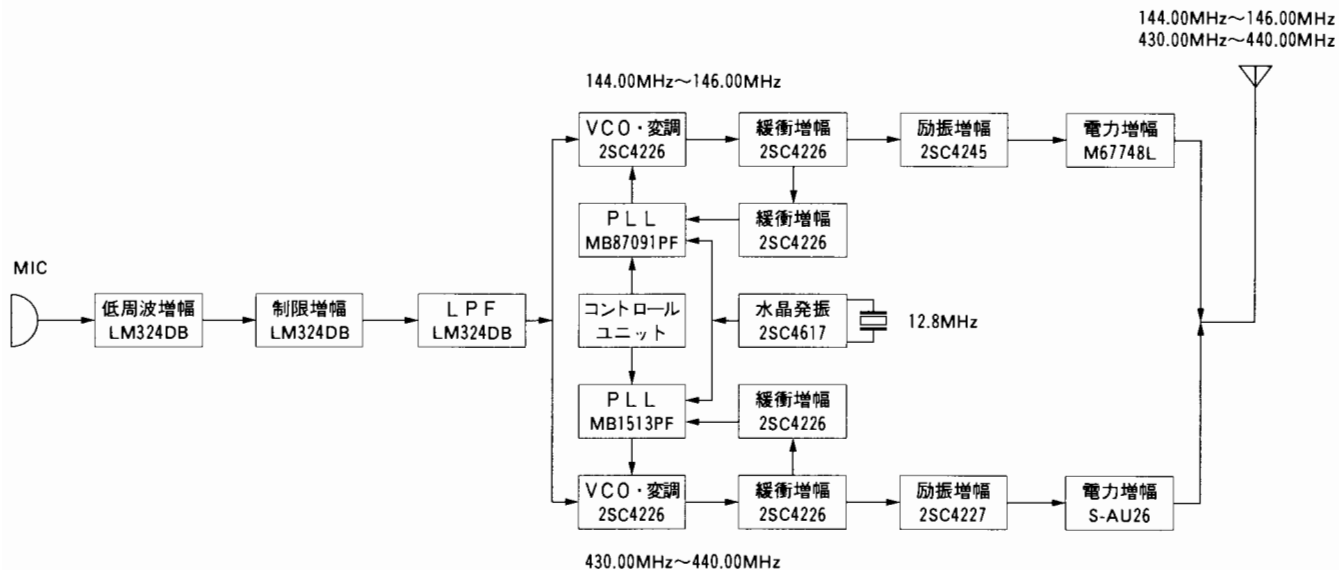
21 希望する周波数の範囲, 空中線電力, 電波の型式

周波数帯	空中線電力	電波の型式	周波数帯	空中線電力	電波の型式
144M	10	F3			
430M	10	F3			

22

工事設計	第1送信機	第2送信機	第3送信機	第4送信機
変更の種類	取替 増設 撤去 変更	取替 増設 撤去 変更	取替 増設 撤去 変更	取替 増設 撤去 変更
技術基準適合証明番号				
発射可能な電波の型式, 周波数の範囲	F3 144MHz帯 430MHz帯			
変調の方式	リアクタンス変調			
定格出力	5 W			
終 段 管	名称個数	144MHz帯 M677481, × 1 430MHz帯 S-AU26 × 1		
	電 圧	13.8 V		
送信空中線の型式	単一型		周波数測定装置	<input type="checkbox"/> 有 (誤差) <input type="checkbox"/> 無
その他の工事設計	電波法第3章に規定する条件に合致している		添付図面	<input type="checkbox"/> 送信機系統図

送信機系統図（JARdによる『保証認定』で申請を行う場合には、登録番号 B146S あるいは型名 FT-729 と記入し送信機系統図を省略できます）



共通定格

送受信周波数範囲：144.00～146.00MHz
430.00～440.00MHz

送受信周波数：上記範囲内で
5/10/12.5/15/20/25/50kHz
の任意のステップ

電波の型式：F3 (FM)

電源：単3乾電池6本9V、オプションの
Ni-Cdバッテリーパック (7.2V/12V)
または外部DC電源

電源電圧範囲：直流5.5～16.0V、マイナス接地

消費電流：受信音声出力時 約190mA
受信スケルチ時 約60mA (144MHz帯)
約50mA (430MHz帯)
約95mA (DUAL)

受信バッテリーセーブ時
(バッテリーセーブレシオ 1:43, 平均消費電流)
約16.0mA (144MHz帯)
約15.8mA (430MHz帯)
約16.8mA (DUAL)

オートパワーオフ時 150 μ A
送信5W出力時 約1.5A以下 (144MHz帯)
(DC13.8V) 約1.6A以下 (430MHz帯)

周波数安定度：-10 $^{\circ}$ C～+60 $^{\circ}$ Cにおいて ± 5 ppm以内

ケース寸法：幅55(66) \times 高さ134(152) \times 奥行き33(43)(mm)
付属単3乾電池ケース使用時
()内は突起物を含む最大寸法

本体重量：約410g (単3乾電池ケース, 単3乾電池
6本, 付属アンテナを含む)

受信部

受信方式：ダブルコンバージョン
スーパーヘテロダイナ

第1中間周波数：15.25MHz (144MHz帯)
44.775MHz (430MHz帯)

第2中間周波数：455kHz

受信感度：0.158 μ V (-16dB μ)以下 (144MHz帯)
0.18 μ V (-15dB μ)以下 (430MHz帯)
@SINAD 12dB

選択度：12kHz以上/-6dB
30kHz以下/-60dB

低周波出力：300mW以上 (8 Ω THD 5%, DC 13.8V時)

低周波出力インピーダンス：4～16 Ω (8 Ω 標準)

送信部

定格終段入力：11.7W (144MHz帯 DC 13.8V時)
15.7W (430MHz帯 DC 13.8V時)

送信出力：5W (DC 13.8V時)

変調方式：リアクタンス変調

最大周波数偏移： ± 5 kHz

占有周波数帯域：16kHz以内

不要輻射強度：-60dB以下

アンテナ出力インピーダンス：50 Ω 不平衡 (BNC接栓)

マイクロホンインピーダンス：エレクトレットコンデンサー型内蔵
(インピーダンス2k Ω)

(測定はJAIAで定めた測定方法によります)

キーボードの動作説明 (通常時)

	TONE 1	TONE 2	LOW 3	MHz ▲
単独で押すと	数字キーの“ 1 ”	数字キーの“ 2 ”	数字キーの“ 3 ”	VFOモード時 1ステップアップ メモリーモード時 通常1チャンネルアップ メモリーチューン動作時は1ステップアップ
(F) キーを押した後に続けて押すと	トーンスケルチ運用 トーンエンコーダー運用 → トーンスケルチ運用 トーンエンコーダー運用 ← トーンスケルチ運用 OFF	①: トーン周波数の設定操作 ②: ビープ音の“ ON/OFF ”操作	送信出力の“ HI/LOW ”切り換え	VFOモード時 1MHzアップ メモリーモード時 通常は1チャンネルアップ メモリーチューン動作時は1MHzアップ
	NAME 4	LOCK 5	STEP 6	MHz ▼
単独で押すと	数字キーの“ 4 ”	数字キーの“ 5 ”	数字キーの“ 6 ”	VFOモード時 1ステップダウン メモリーモード時 通常1チャンネルダウン メモリーチューン動作時は1ステップダウン
(F) キーを押した後に続けて押すと	①: バッテリーセーブ機能の“ ON/OFF ”操作 ②: バッテリーセーブ時間の設定操作	キーロック・PTTロック操作 (DIALロック操作を含む) キーロック → PTTロック → キーロック & PTTロック キーロック・PTTロック 解除	送信オフセット運用 マイナスシフト → プラスシフト シンプレックス →	VFOモード時 1MHzダウン メモリーモード時 通常は1チャンネルダウン メモリーチューン動作時は1MHzダウン
	STEP 7	VOX 8	STEP 9	CODE PAGE PAGE
単独で押すと	数字キーの“ 7 ”	数字キーの“ 8 ”	数字キーの“ 9 ”	ページャー機能・ベル運用操作 ページャー設定 → トリガーページャー動作 → コードスケルチ設定 ページャー設定・ベル運用動作 OFF → ベル運用
(F) キーを押した後に続けて押すと	①: ステップ幅の設定操作 ②: スキャンストップモードの設定操作	VOX運用 HI (VOX運用 高度HI) → LOW (VOX運用 高度LOW) → OFF (VOX運用 OFF)	メインバンドとサブバンドのデータ入れ換え (メインバンドのデータがサブバンドへ移りサブバンドのデータがメインバンドへ移行します)	ページャーコードの設定操作
	MEMO MIN	0	VFO	(F)
単独で押すと	①: メモリーチャンネルの呼び出し (メモリーモード) ②: メモリーチューン動作	数字キーの“ 0 ”	①: VFOの呼び出し (VFOモード) ②: VFO A/VFO Bの切り換え	①: ファンクションキー ②: 0.5秒以上押し続けるとメモリーセット操作
(F) キーを押した後に続けて押すと	メモリーモード時 メモリーチャンネルスキップセット/リセット操作 VFOモードおよびコールチャンネル運用時 ダイレクトPMS操作	セットモードへ移行します	通常 プライオリティ機能の“ ON/OFF ”操作 メモリーチューン動作時 メモリーチャンネルのデータをVFOに移すことができます	ファンクション解除
	DTMF CALL	ALT HAND	SUB OP SUB	GLOCK CLV
単独で押すと	コールチャンネルの呼び出し/解除	メインバンドとサブバンドの切り換え (メインバンドとサブバンドが切り変わります)	モノバンド運用 (サブバンド “ON/OFF” 操作) 送受信操作とも (メインバンドで行う運用方法です)	送受信周波数リバース運用
(F) キーを押した後に続けて押すと	DTMFモードへ移行します	オルタネート機能の“ ON/OFF ”操作	サブバンドオペレーション (サブバンドに対して行えるようになります)	①: 時刻表示 ②: 時刻表示中に再度このキーを押すと、時刻設定モードに移行します。

キーボードの動作説明（セットモード時）

	POWER (1)	LIGHT (2)	LOW (3)	MHz (▲)
単独で押すと	ベージャー運用時の 送信ディレイタイムの切り換え操作 450ms → 750ms 750ms → 450ms	呼び出し音の回数変更操作 OFF → 1回 → 3回 → 5回	オートマッチックパワーオフ(APO)機能 の設定操作 APO "ON" (10分) → APO "ON" (20分) APO "OFF" → APO "ON" (30分)	MEM + MHz (▲) または MEM + MHz (▼) 操作時のステップ幅が 10MHzに設定されます
MEM キーを押した 後に続けて押すと	送信ホールド機能の "ON/OFF" 操作	—	予告メロディー音の変更操作 DTMFメモリー-1*にメモリーした曲 → イニシャライズ曲 →	—

	SAVE (4)	LOCK (5)	MHz (E)	MHz (▼)
単独で押すと	TX SAVE 機能の "ON/OFF" 操作	ダイヤルロック機能の "ON/OFF" 操作	① : シフト幅の変更操作 ② : ARS機能の "ON/OFF" 操作	MEM + MHz (▲) または MEM + MHz (▼) 操作時のステップ幅が 1MHzに設定されます
MEM キーを押した 後に続けて押すと	DTMFモニター音の変更操作 ビーブ(ドレミ)音 → DTMF音 DTMF音 → ビーブ(ドレミ)音	ビーブ音の変更操作 ドレミ音 → DTMF音 DTMF音 → ドレミ音	—	—

	STOP (7)	VOX (8)	SEND (9)	OSK (PAGE)
単独で押すと	BUSYインジケータの "ON/OFF" 操作	VOXディレイタイムの切り換え操作 500ms → 1s → 1.5s	ベージャー自動応答機能の "ON/OFF" 操作	ワンタッチベージャー機能の "ON/OFF" 操作
MEM キーを押した 後に続けて押すと	1 kHz桁入力の "ON/OFF" 操作	DTMFコードの ROW出力 "ON/OFF" 操作	DTMFコードの COLM出力 "ON/OFF" 操作	呼び出し音の動作変更操作 (1分おきに呼び出し音を 鳴らすか? / 鳴らさないか?)

	MR (MR)	SET (6)	PHI (VFO)	MEM
単独で押すと	キーボード動作の入れ換え操作 (通常のキー操作が各種の機能の設定操作になり ファンクション時のキー操作が 数字キーの動作になります)	セットモードの解除	受信音の切り換え操作	ファンクションキー
MEM キーを押した 後に続けて押すと	—	—	—	ファンクション解除

	CALL (CALL)	CALL (CALL)	DISP (DISP)	CLONE (CL)
単独で押すと	呼び出し音の確認操作	IBS (Intelligent Band Select) 機能の "ON/OFF" 操作	—	レピーター運用時の SQL OFFスイッチの動作変更操作 (リバース機能も同時に動作させるか? 動作させないか?)
MEM キーを押した 後に続けて押すと	呼び出し音の変更操作 14.4MHz イニシャライズ曲 → DTMFメモリー-2*にメモリーした曲 430MHz イニシャライズ曲 → DTMFメモリー-3*にメモリーした曲	サブバンド表示の切り換え操作 "-----" 表示 → 時計表示 → バッテリー電圧表示 →	—	DTMFコードの 送出スピード切り換え操作 100ms → 150ms 150ms → 100ms

このセットについて、または他の当社製品についてのお問い合わせは、お近くの当社営業所/サービス宛にお願いいたします。

またその際には、必ずセットの製造番号（本体背面に貼ってある銘板および保証書に記入してあります）を併せてお知らせください。

なお、お手紙をいただくときには、お客様のご住所・ご氏名は忘れずにお書きください。

八重洲無線株式会社

営業部 ☎146 東京都大田区下丸子1-20-2

札幌営業所/サービス ●003 札幌市白石区濠水6条1-1-33 石川ビル ☎011(823)1161
仙台営業所/サービス ●983 仙台市若林区大和町5-6-17 ☎022(235)5678
関東営業所/サービス ●332 埼玉県川口市弥平1-5-9 ☎048(222)0651
東京営業所 ●103 東京都中央区八重洲1-7-7 ☎03(3271)2861
名古屋営業所/サービス ●457 名古屋市南区戸部町2-3-4 ☎052(811)4949
大阪営業所/サービス ●542 大阪府中央区谷町9-1-22 NK谷町ビル ☎06(763)7151
広島営業所/サービス ●733 広島市西区己斐本町2-12-30 BKビル ☎082(273)2332
福岡営業所/サービス ●812 福岡市博多区上牟田1-16-26 第2山本ビル ☎092(482)4082
サービスセンター ●332 埼玉県川口市弥平1-5-9 ☎048(222)0651

© 1992 八重洲無線株式会社 禁 無断転載・複写

この取扱説明書は、再生紙を使用しております。